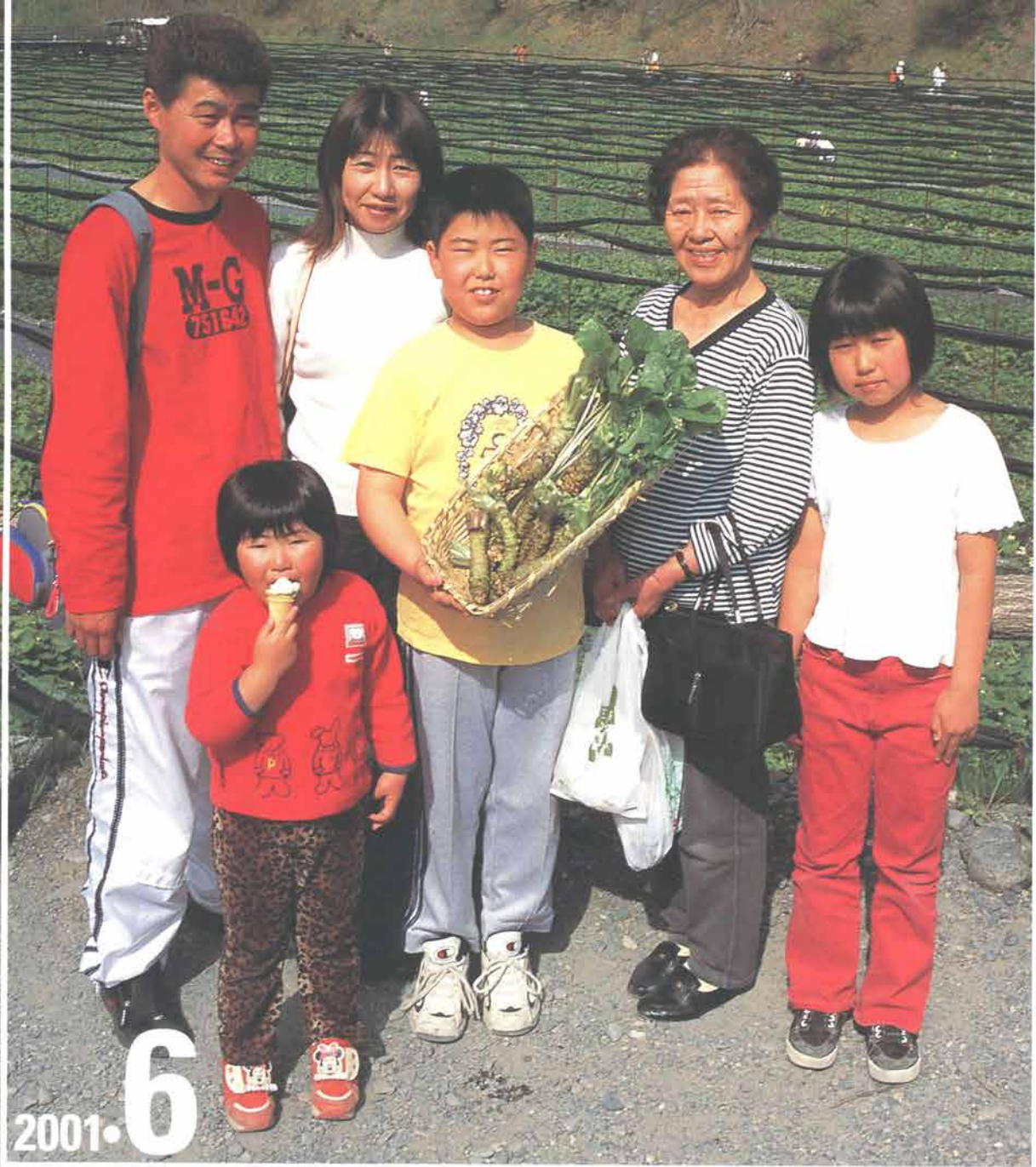


明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：水保全と環境



2001・6

特集

水保全と環境

目次

市民・行政のパートナーシップによる水環境の保全と再生 小倉紀雄（東京農工大学教授）	4
日本一の清流「歴舟川」で砂金掘り 伏見悦夫（北海道大樹町長）	8
民間主導で環境浄化と啓蒙活動展開 村上伸介（宮城県石巻市街づくり推進課主任）	10
好評だった全国水の郷サミット 石川隆（神奈川県清川村総務部長）	12
渇の自然保護で文化基金創設 清水重蔵（新潟県豊栄市ヒュー福島湯館長）	14
自然を生かした水と湯の郷 不破九二生（三重県長島町建設部長）	16
公共下水道事業、16年度の完成目指す 小林幸生（兵庫県上郡町企画財政課主事）	18
身近な水辺の保全と創造目指して 友延栄一（岡山県岡山市環境調整課主事）	20
活発な水源の森交流事業 大石隆彦（高知県北川町行政事務組合広域政策室長）	28
湧水利用で日本一のそうめん流しも 上立兼男（鹿児島県開聞町長）	30
新しい大阪づくりに向けて 太田房江（大阪府知事）	3
●コラム	
これからの街づくり 山本重三（地域開発研究所理事長）	22
「出口」こそ街づくりのカナメ 渡辺紀士見（福島民報社取締役論説委員長）	27
●地方行政関係地場解説	
「第一回地域伝統芸能まつり」の開催について 総務省自治行政局自治政策課	32
●トピックス	
ネイチャースクール 役場とNPOがいつしよになって 四方洋（NPOネイチャースクール理事長）	34
一回百円の福祉タクシを運行 新安哲次（愛知県西春日町福祉部福祉担当常務）	39
21世紀のまちづくり目指し、C-導入 福島県小高町	44
第五回ふるさとイベント大賞受賞九団体を表彰	36
●地域づくり団体探訪	
南会津グリーンストッククラブ・福島県田島町	40
●地域を支える女性ハワ	
ウイメンズ隼人・鹿児島県隼人町	42
地域だより／センター通信	45・46
●クラブ	
水保全と環境	47・48
都道府県漫遊／手前みそですが	23

表紙●安曇野のわさび田

♪春は名のみの風の寒さや
早春賦で知られる長野県安曇野は、わさび栽培が盛んだ。生産量は静岡県をしのぎ日本一を誇る。穂高町の大王農場は広さ十五畝（東京ドーム十一個分）と日本一のわさび田。

日本名水百選の一つ、北アルプ



スの伏流水が日量十五万リットル出ており、水温は一年を通じて十三度とわさび成育には最適。二年毛ノが辛みがほどよく食に合う。「今年は雪が多かったせいか、わさびの花の咲く時期が例年より一週間ほど遅れた」（清水栄蔵主任）。大王農場では十七年前に開発したわさびソフトクリームが好評で、今ではわさびを使った製品が、そば、シューマイ、コロッケ、ワインなど五十種類にも及ぶ。体験工房もあり、自分だけのわさび漬をつくることもできる。年間の観光客は約百八十万にも上る。

穂高には町の守り神・道祖神が道端でやさしくほほ笑んでいる。
●ペンリやなぎ ●カメラII松岡勉



水保全と環境

水環境を守ろう



絶滅危急種のオニバス

水の駅・ビュー福島潟＝新潟県豊栄市のシンボル福島潟は、日本の自然百選、全国水の郷百選、日本の音風景百選にそれぞれ選ばれた自然の宝庫

世界の歴史をみると、古代文明は川を中心に栄えた。

水はわれわれの日常生活に密接なかかわりを持ち、水なしには生きていけない。

わが国では「水と空気はタダ」との風潮が長く続いた。

産業発展のため工場排水や家庭の雑排水が平気で川に流され、中には裁判に持ち込まれたケースもある。

1980年代ごろから環境問題がクローズアップされ、行政も遅まきながら対応するようになった。

ここでは運河、ダム、潟、ため池など水環境に取り組む各地の事例を紹介したい。



足守川の水辺教室(右:左)

①水辺環境＝岡山県岡山市

市内には旭川、吉井川などの大河川をはじめ水路群、ため池が1000以上もあり、水辺に恵まれている



②流域ネットワーク＝高知県嶺北広域行政事務組合

嶺北地域は一つの意識で関係自治体が共同で吉野川の水源を守るため植林などを行っている



香川用水の水源地の森づくり事業

水源の森文流事業 吉野川立派な水源地





川と運河＝宮城県石巻市

日本一長い貞山運河の北に北北上川運河が流れ、その入り口には洋風建築の石井閘門がある



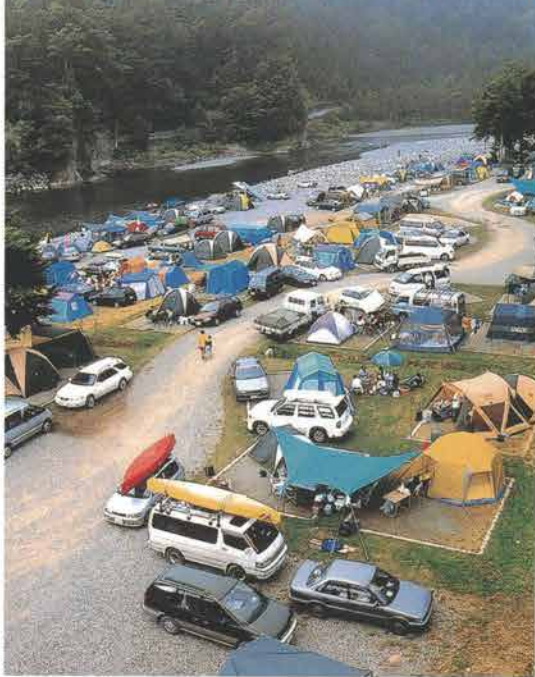
ダムとの共存＝神奈川県清川村

平成12年度に首都圏一の多目的ダム、宮ヶ瀬ダムが完成。総貯水量は1億9300万立方メートル



下水処理＝兵庫県上郡町

町民は古くから町を流れる千種川の恩恵を受けてきた。水質保全のため、さまざまな事業が行われ、川は鮎釣りのメッカとして知られる



砂金の川＝北海道大樹町

日本一の清流、歴舟川では古くから砂金掘りが行われ、都市住民との交流の場になっている



最古の井戸＝鹿児島県開聞町

郷土史によると、日本最古の井戸「玉乃井」があり、近くには日量10万トンのきれいな湧水が出ている



輪中の里＝三重県長島町

恵みと被害をもたらした木曾三川河口にできた輪中。治水・利水を目的とした長良川河口堰が完成し、安全度が高まった



太田房江 大阪府知事

新しい大阪づくりに向けて——大阪の再生——

遠い未来とされていた二十一世紀が幕を開け、IT革命など、新世紀の発展に向けた可能性が語られています。その一方で、財政危機をはじめとするさまざまな「世紀末の負債」の総決算と新たなチャレンジが求められており、ここ大阪においても、例外ではありません。

大阪府では昨年末に「大阪の再生・元気倍增プラン」(大阪二十一世紀の総合計画)を策定しました。これは、府民の皆さんをはじめ、大阪で住み、働き、学んでおられるすべての方々や企業、NPO、市町村などが一緒に、なつて二十一世紀の大阪づくりを進めていくための共通の目標とその実現のための基本的な考え方を取りまとめたものです。

とくに本年は「大阪の再生」を本格始動させる年と位置付け、前向きな危機感をもって、大阪こそが先頭を切つて着実に歩みだそう、そして、府民主権、透明性、府民との協働など、二十一世紀型の価値観に即した行政スタイルを率先して打ち出していくこと、決意も新たにしているところです。

大阪の再生を進めていくためには、まず「産業の再生」が重要です。昨年九月には「創都・大阪」の実現を目指して「産業再生プログラム(案)」を策定しました。「創業するなら大阪」といわれるよう、府民と一体となつてプログラムのメニューの本格的な具体化に取り組み、大阪産業再生の道筋をより確かなものとしてまいります。

にぎわいに満ち、温かみを実感できるまちづくり、即ち「都市の再生」も喫緊の課題です。少子高齢社会に対応したバリアフリー化、IT化や安全に配慮した基盤整備の促進など、都市の魅力を高めるための取り組みを

進めてまいります。

さらに、「府政の再生」つまり大阪府自身の自己改革も求められています。『あれもこれも』といった従来型の発想をリセットし、『あれかこれか』という厳しい施策選択を従来にも増して進めていく必要があります。

今年度から導入する施策評価はこれまで実施してきた行政評価を発展させたもので、施策選択の有効なツールになると考えています。

また、利便性と効率性の高い行政サービスを実現するため、平成十五年度を目途とする「電子府庁(e-ふちよう)」アクションプランを推進するとともに、IT化と併せた全庁的なBPR(業務改革)に取り組んでいくところです。

そして、これら三つの再生を推進するうえで何より重要なのは「協働」の視点であると思います。「天下の台所」と言われた時代から、この大阪は伝統的に民の力が官を押し上げるようにして発展してきた地域です。大阪再生に向けた取り組みには、府民の皆さんやコミュニティ、NPOとの協働など、二十一世紀にふさわしい、新しい視点からのアプローチを加えていくことが必要です。

チャレンジ精神と改革の意思のないところに、確かな未来はありません。私は、府民の皆さんが精一杯力を発揮できるよう土壌・基盤づくりを行うため、知恵と協働で新しい府政を築いてまいります。そして、大阪の元気が倍増し、府民の皆さん一人ひとりが、生き生きと光り輝く大阪を実現していきたいと考えています。

市民・行政の パートナーシップによる 水環境の保全と再生



小倉紀雄 東京農工大学教授

名水と水の郷百選

「春の小川はさらさら行くよ、岸のすみれや
れんげの花に……」（高野辰之作詞、林柳波
改詞、岡野貞一作曲）とうたわれた清流は大
正初期（一九一〇～一九二〇年ころ）の東
京・代々木付近の河骨川（こうはね）といわ
れているが、現在、都市にはそのような川はあ
まり残っていない。

環境基本法（一九九三年十一月施行）に基
づき、環境基本計画が九四年十二月に制定さ
れ、長期的な目標として、「循環を基調とす
る経済システムの実現」「自然と人間との共
生の確保」「環境保全に関する行動への参加」
「国際的な取り組みの推進」の四つが掲げら
れた。その後、さまざまな自治体でそれぞれ

の地域にふさわしい独自の環境基本計画を策
定しており、それらの目標にしたがって国や
地方自治体の環境行政が推進されている。

八五年に優れた水環境として「名水百選」
が環境庁（現環境省）により、また九五年に
は「水の郷百選」が国土庁（現国土交通省）
によりそれぞれ選定された。「水の郷」には
水を守り、水を生かした地域づくりを推進し、
優れた成果を上げている百七地域が選定され
ており、本誌でも「水の郷」に選定された代
表的な九地域での生き生きとした活動が紹介
されている。

九七年には、河川法が改正され、治水・利
水に加え、水質・生態系・景観・アメニティー
など河川環境を総合的に考慮した河川制度や
地域の意見を反映した河川整備の計画制度が
導入された。二〇〇一年三月には多摩川水系

河川整備計画が市民参加により策定された。

このように、良好で快適な水環境を保全し、
取り戻すために市民と行政のパートナーシッ
プによる活動が全国各地で行われるようにな
った。そして、水や物質循環のバランスを地域
や行政枠を超えて流域全体、さらに広域で考
え、バランスのとれた社会システムを構築する
ことが重要な課題であることが認識されるよ
うになった。このような活動は「春の小川」を
取り戻し、「かけがえない地球」を守ること
にもつながり、大変意義のある試みであろう。

良好で快適な水環境の保全と創成

良好で快適な水環境を保全、創成するため
に、身近な河川を例に考えてみよう。

①豊かな水量

安全で豊かな水量を持つ水辺を保全し、創成することは極めて重要なことである。大雨時にも河川が洪水、はんらんを起こさないように、流域全体で森林、緑地など透水性地域をできる限り維持することが根本的に重要なことである。また、浸透性面積が減少している都市域では、雨水の浸透設備（雨水浸透ます、トレンチなど）や貯留施設を設置することが望まれる。これらの積極的な対策により、平常時の豊かな水量が確保され、自浄能力も維持される。

② 良好な水質

良好な水質を保全するために、源流から河口まで流域全体で総合的に対策を考えることが大切である。

〈森林の保全〉

森林はそこから流れ出る河川の水量を安定して保つとともに、水質を良好に保つ機能を持っている。源流の森から発した水はやがて海へ流れ込む。森林が伐採されると、山地から流出した土砂が河川を通し運ばれ、沿岸域にたい積し、魚介類の生産量が減少する。しかし、伐採された山林に植林を行うと、緑化面積の増加とともに、沿岸域の魚介類の生産が回復することが報告されている。

北海道や東北地方では「森は海の恋人」というキャッチフレーズを掲げ、漁民が森林の保全に努力をしておりこのような漁民の森は

全国に広がっている。河川流域で森林を育成することは環境を総合的に考え、保全するために重要なことである。

〈雑排水対策〉

下水道の整備や合併浄化槽の設置は水質の改善に有効であるが、これらの未整備地域では家庭における雑排水対策が効果的である。たとえば、東京湾流域の住民二千四百万人の二割の人が雑排水対策に協力すると、一日に六割のCOD（化学的酸素要求量）有機物量の指標が削減され、この効果は三十万～四十万人の下水処理施設での処理効果に匹敵する。

都市に残る「春の小川」＝水の郷に選定されている東京都日野市・よそう森堀は素掘りの水路が並んであるせせらぎで、市民の協力により維持・管理されている



〈河川内での対策〉

河川での自浄作用を強化するような対策が積極的に取り入れられている。たとえば、河川で砂利土を利用した礫間接触酸化法や沿岸域における大型植物（ヨシ）を用いた浄化対策が実施され、水質浄化の効果が認められている。

③ 快適な水辺環境

快適な水辺は水量が豊かで、水質が良好であり、多様な生物が生息する環境であろう。コンクリート張りの河川を生物が生息しやすい自然型の河川への修復は、身近な河川や用水において行われている。このような修復は景観面ばかりでなく、水質浄化の面からも好ましいことである。

④ 歴史や伝統的な文化を生かした水環境

古代文明はナイル川、黄河など河川流域を中心として発展してきたように、川の流域にはヒトが住み、特有の文化が生まれ、はぐくまれてきた。しかし、伝統的に引き継がれてきた文化は人間活動の増大や生活様式の変化に伴い失われつつあるので、それぞれの地域にふさわしい水辺環境や伝統的な文化を保全し、後世に伝えることが大きな課題である。

市民による水環境の保全と再生の試み

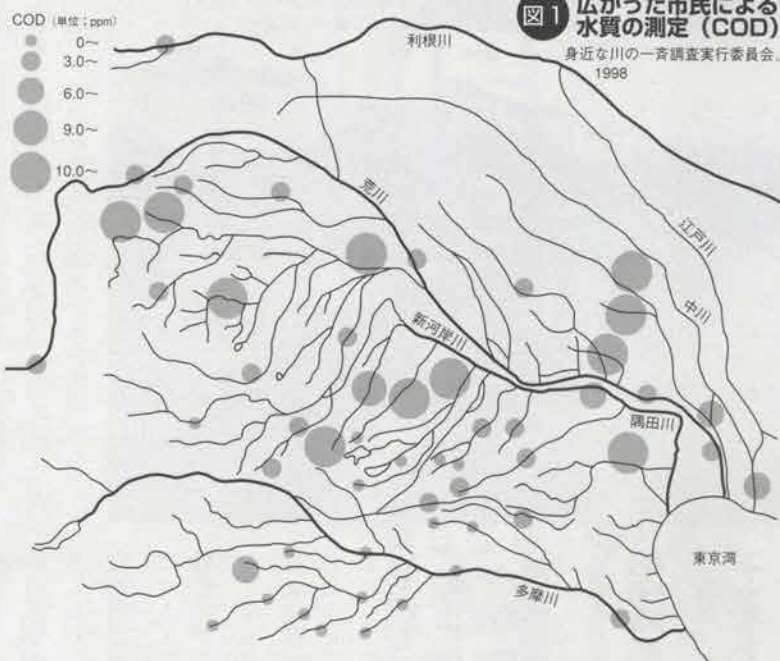
現在、水質汚染の主な原因は生活排水によると考えられ、その対策が重要な課題となっ

「浅川地区環境を守る婦人の会」は八四年八月より東京都八王子市の南浅川など二十地点で毎月一回、簡易測定法（パックテスト）による水質測定を行った。その結果、生活排水



みんなができる水質の測定


広がった市民による水質の測定 (COD)
 身近な川の一斉調査実行委員会。
 1998



このような主婦による一連の活動は大きな反響を呼び、さまざまな地域に水質の調査と木炭を用いた水質浄化の試みが広がっていった。

八九年六月、多摩川やその支流の野川など十八河川・百十八地点で市民による「身近な川の一斉調査」が行われ、結果が水質汚染マップとしてまとめられた。その後も毎年、水質の一斉調査が行われており、さらに荒川流域などにも広がり、九八年には十周年を迎えた（図1）。調査は日曜日に行われ、多くの子供たちが参加でき、環境学習の場として役立ってきた。



九五年環境庁により設立された「こどもエコクラブ」では、九七年の夏に全国の河川で水質調査を行った。全国千二百地点からCODなどの測定結果が寄せられ、エコマップとしてまとめられた。小中学生が自ら身近な川の様子を調べ、水質を測定することは、水の汚れの実態や汚れの原因を知り、その解決策を考えるきっかけとなり、環境学習として大変有意義な試みである。

多くの市民が行政とともに水質を測定し、結果を読みとり、その意味を評価できるようになったことは、市民活動の質とレベルを飛躍的に向上させた。“市民環境科学”が誕生し、発展したのである。水質測定ネットワ

ークが広がった理由は、市民と行政のパートナーシップの進展、市民の熱意や専門家による適切な指導であったが、簡易測定法の普及とそれに貢献したメーカーの役割も大きい。市民グループは水質の測定のほかに、水環境の総合的な評価を目指し活動をさらに継続、発展させている。

さまざまな指標による水環境の総合的な評価

水環境の評価として現在用いられている「水質汚濁に係る環境基準」（人の健康の保護に関する項目、生活環境の保全に関する項目）のほかに、生物や景観など水辺に関する項目を加え、水環境を総合的に評価することが重要である。評価することが望ましい項目として、水量、水辺の景観（河川敷、護岸、水面の様子）、色、臭い、生物（魚、底生生物、植物、鳥類）などが考えられる。

多摩川流域などの市民グループは「身近な川の「一斉調査」の結果をもとに、川の水質とその周辺の様子（臭い、色、濁りなど）を考慮した水質総合指標を提案した。簡易法による水質の測定結果と水辺の観察結果による総合指標値には良い相関があることが明らかにされた。

日本自然保護協会は九五年六月、全国で一斉に川の調査を行った。マニュアルに基づき、川

の周りや流れの様子、河原の鳥、植物など七つの項目について観察が行われた。全国で二千八十二地点、三千人以上の参加者があり、報告されたそれぞれの地点の自然度について点数をつけ、七項目の合計点から川の自然度が総合的に評価された。これらの結果は全国自然度マップとして取りまとめられている。

「春の小川」を取り戻すために

水環境の保全と修復のためには行政、市民、事業者の協力と合意が必要である。そのために話し合いを行う「しくみ」をつくることが重要であるが、注目すべき提案が行われた。九二年に、東京都多摩地域が神奈川県から東京府へ移管され百周年を記念した事業「TAMA Aらいふ21」が実施された。そのテーマプログラムの一つに「湧水崖線の保全」があり、それを推進するために「湧水崖線研究会」が発足した。同研究会では市民と行政関係者が同じテーブルについて、二十一世紀における多摩地域にある水と緑を保全するための方法としくみが検討された。その際「三つの原則・七つのルール」（表1）が提案され、自由で実りある議論を行う場をつくることのできた。その後、この「三つの原則」は市民と行政の話し合いのルールとして賛同を得て、話し合いの前提として建設省（現国土交通省）

3つの原則

1 自由な発言

2 徹底した議論

3 合意の形成

7つのルール

- 1 参加者の見解は、所属団体の公的見解としない。
- 2 特定個人・団体のつるしあげは行わない。
- 3 議論はフェアプレーの精神で行う。
- 4 議論を進めるに当たっては、実証的なデータを尊重する。
- 5 問題の所在を明確にしたうえで、合意を目指す。
- 6 現在係争中の問題は、客観的な立場で事例として取り扱う。
- 7 プログラムづくりに当たっては、長期的に取り扱うものおよび短期的に取り組むものを区分し、実現可能な提言を目指す。

表1

湧水崖線研究会、1993

や東京都など多くの場で採用されている。水辺などの環境は季節や時間により変化しやすいので、できる限り長い期間、継続して調査・観察を行い、保全を考えることが大切である。このような活動は地域から地球規模の環境問題まで広く考えることにつながり、さまざまな環境問題を解決するための実践活動を行うきっかけにもなる。それぞれの地域にふさわしい「春の小川」を保全し取り戻すために、行政・市民・事業者が協力し、足元でできる実践活動を広げていきたいと思う。

日本一の清流「歴舟川」で砂金掘り 自然環境保全で清掃活動



れた条件を売り物に、地域活性化の一環として「航空宇宙産業基地構想」をまとめ、実現に向け取り組んでいる。

町の中央を流れる歴舟川は、日高山脈（コイカクシユサツナイ岳）を源として、ボンヤオロマツ川、中の川、ヌビナイ川などの支流を集め、太平洋に注いでいる。

歴舟川は、「南西の風」を意味する別名「日方川」^{ひかた}とも呼ばれている。

歴舟川に鯉のぼりを泳がす事業

宇宙産業基地構想も

大樹町は、北海道の東部十勝平野の南に位置し、東は太平洋、西は日高山脈に接し、町の中央には日本一の清流「歴舟川」が流れる人口六千八百人余りの農業（酪農）を中心に林業、漁場を基幹産業とした町である。また、ここ数年、恵まれた自然、広大な空間など優

歴舟川は、昭和六十二年に環境庁（現環境省）の公共用水域の水質調査で日本一に輝いた清流であり、その後、四度にわたり日本一に輝いている。また、平成八年には、国土庁（現国土交通省）による水の郷百選にも選ばれている。

これを機に「歴舟川清流まつり」「歴舟川に鯉のぼりを泳がす事業」などさまざまなイ



大樹町長
伏見悦夫

ベントが行われている。

イベントの一つである「歴舟川清流まつり」は、平成元年、歴舟川が日本一きれいな川として評価されたのを機会に毎年開催され、大樹町の真夏の一大イベントとして、町民にもっとも親しまれ、愛されるまつりとなっている。

世相を反映した「仮装イカダ下り」、歴舟川上流域より自然を満喫しながら川を下る「カヌーフェスティバル」、また、古式ゆかしくとり行われる「ベルブネ（アイヌ語…ベルブネイ＝歴舟川という意味）火祭り」は大樹神社の採火を二十日にも及ぶたいまつに点火させ、夏の夜空を焦がさんばかりに燃え上がらせるなど、まつりをいっそう盛り上げる。

宝の川

「歴舟川に鯉のぼりを泳がす事業」は、今年で十一回目を迎え、そのつど個人で使用しなくなった鯉のぼりを寄贈してもらい、毎年五月の連休を前に、二百匹以上の鯉のぼりを川幅一面に泳がし、町を通る人びとの目を楽し

ませている。

また、このほかにも、「川」にちなんださまざまなイベントが行われており、清流歴舟川を大いにPRしている。

歴舟川は古くから、砂金の採れる川として知られ、「宝の川」として有名である。

寛永年間（一六三五年）には、大樹町内で砂金採取が始まったと伝えられている。その後、明治年間には、全国各地より一獲千金を夢見た百人近くの砂金掘師たちがこの地に集まり、砂金採取を行った。

砂金探訪会

しかし、大正、昭和を経て、だんだん砂金掘師たちの数も減り、戦後には数人だけが残り、最後の掘師も昭和四十六年に引退した。

現在では地域住民により、昔ながらのゆり板、カッチャを使用した砂金掘りが行われている。砂金掘りの伝統、歴史を後世に残そうと、地域住民が中心となって、砂金掘り探訪会などの参加者に、砂金を使った名刺大のしおりを有料で頒布するイベントも実施している。

過去には、砂金掘り全国大会も当町で行われ、砂金掘りを楽しむ人も年々増えてきている。また、都市住民との交流にも役立っている。

歴舟川周辺には、景勝地で有名なところもある。四季折々の景色が楽しめる「坂下仙峡」、奇勝奇岩で有名な「カムイコタン（アイヌ

語＝神様のいるところ）」など自然豊かなところがある。

また、歴舟川には大きなダムなどもなく、川魚の宝庫でもある。アカハラ、ニジマス、ヤマベ（ヤマメ）などたくさん川魚が生息しているほか、秋にはサケの遡上も多く見られる。

川に親しめる環境づくり

この歴舟川の自然景観を守ろうと、地域住民自らが主体となる、「歴舟川を守る会」で



歴舟川と町全景

は流木の撤去などの清掃活動を行っている。また役場職員でつくるフィッシングクラブではヤマベの稚魚放流事業などを地域ぐるみ一体となって行い、川の大切さについて考えていこう、守っていこうという意識で、一生懸命取り組みしており、今後ますますの活動が期待される。

このほか、キャンプ場の整備、水辺ブラザ整備事業として、砂金掘り体験やカヌー終着場の施設整備、さらに河川広場（サッカー場、パークゴルフ場など）、町民が川に親しめる環境づくりを進めており、「清流と出会い、ふれあい、共生するまち」を目指し、取り組んでいる。

近年、世界的にも、河川文化を築くためのフォーラムも企画され、川のくに、水のくにでもある日本においても豊かな水環境とのかかわり方が、行政視点でも重要だと取り上げられている。

災害から身を守るだけにこだわっているのは、いけない時代だと感じている。

景観も含め、温かみのある、そして、心をいやしてくれるそんな生活に深くかわりのもてる川を考えていくことが大切ではないだろうか。

当町は、そのようなことをしっかり見据えながら、今後、事業を推進していきたいと思っている。

民間主導で環境浄化と啓蒙活動展開 ロマンあふれる水の都に



石巻市街づくり推進課主幹
村上伸介

東北最大級を誇る花火が打ち上げられる「石巻川開き祭り」、北上川沿いを駆け抜ける「シーサイド馬拉ソン」、川との共生をテーマに行われる「北上川フェア」、先人の偉業を称え運河を後世に継承するための「運河フェスティバル」など石巻市では水にちなんだ行事が数多く行われ、市民にとって川・運河そして海と水資源に対する思い入れは特別なものがある。これには、石巻を取り巻く環境と歴史が深くかかわっている。

栄華と衰退

石巻市は、宮城県の北東部に位置する。市内を縦断し太平洋に注ぐ東北最大の川「北上川」と、日本一長い貞山運河の最北端に当たる「北北上運河」が流れ、恵まれた水環境と豊かな自然を有する「水の都」である。

江戸初期に伊達政宗の命を受けた川村孫兵衛重吉翁によって、舟運を目的に北上川を開削する大改修事業が行われ、石巻は仙台藩の重要な港町として栄えた。江戸時代には千石船やひらた舟が往来し、明治以降は蒸気船や

発動機船、漁船と姿を変えた。戦後は漁港と魚市場が移転するまで、北上川は全国のサンマ船やカツオ船の入港でにぎわっていた。石巻は、水を活用し、水と共に築いた「水の都」として繁栄した。

北北上運河は、明治新政府によるわが国初の西洋式港湾である野蒜築港に伴い、野蒜港へ物資を運ぶ目的で明治十一（十四年）にかけて開削された。元勲大久保利通の声掛けにより、運河入口には日本初のれんが積み洋風建築である石井閘門が設けられた。

ところが開港してわずか三年後の十七年、台風の影響で築港計画は幻と消えてしまった。その後、運河はそのまゝ物資の輸送に利用されたが、道路網が整備されるにしたがって利用が減り始め、三十年代には、ついにその姿を消してしまつた。

陸上輸送が時代とともに盛んになるのに伴って水運が衰退し、水資源を生かしたまちづくりが顧みられなくなった。次第に水質の悪化が進み、折角の水資源も埋もれたままの状態がしばらく続いた。

地域活性化への取り組み

しかし、近年急速に、北上川や北北上運河の歴史を継承しながら、新たに水と共生したまちづくりを行おうとする市民の機運が大きくなった。水関係の民間団体が数多くでき、水資源の活用、再生の動きが始まっている。

北北上運河をライトアップし啓蒙活動を行っている「キャナルネット」、水生生物調査に取り組んでいる「エコロジーと水の会」、水辺空間の利用を考えている「水を活かした街づくり研究会」、北北上運河や中瀬の整備について提言をしている「21石会」、北上川を軸に、歴史・文化の研究や自然保護活動などを行っている「北上川流域連携交流会」、川辺の学校などを開催し親水活動を通じての水環境との共生を考える「NPO法人ひたかみ水の里」、川を愛しコンサート活動などを通じて水環境の保全を訴える「北上川を愛する女性の会」など水にかかわる民間団体が数多くできた。それぞれの手法で行政と協働しながら、水環境の浄化とその啓蒙に活発な活

動を展開している。

運河沿いの一市二町が持ち回りで行っている運河フェスティバルや北上川フェアなどでは、各団体が手弁当でさまざまな趣向を凝らして水資源の保全を多くの人がびとに呼び掛けている。一方で、自ら水質の検査や地道なごみ拾い活動なども行ってきた。

このような積極的な民間団体の活動などが評価され、平成七年に旧国土庁から「水の郷」の認定を受けることができた。

行政も積極的に事業を推進

これらの民間の熱意と機運に呼応して、行政も、さまざまな事業を推進してきた。

石巻市の総合計画「ロマン海都・石巻」は、「水と緑の潤い空間形成プロジェクト」として水にかかわる事業を多数盛り込んでいる。排水路の暗きよの上に草花を植えて、通る人にゆとりと潤いを与える緑道「グリーンロードいしのまき」をつくったり、北上川沿いにサイクリングロードを整備し、市民の親水空間を設けている。目下、漫画家の故石ノ森章太郎氏のアドバイスで七月に開館する「石ノ森萬画館」と併せ北上川の中州「中瀬」を「水辺プラザ」として市民憩いの場に整備している。

宮城県は、北上運河兩岸を河川公園にし、皇太子御成婚を祝って桜を植樹したり、ボートやカヌーの利用ができる階段護岸、係留施設

設、黒松林を生かした散策路や花壇を整備した。

また、国も、皇太子御成婚を記念し、「歴史のかおる運河整備事業」の一環として、北上川から運河への導水施設を建設し、運河の水質浄化を図る「北上運河の浄化・周辺整備事業」を実施した。



まわりの土手と一体化した運河交流館

平成十一年七月には、石井閘門の隣に、導

水施設と一体の「北上川・運河交流館」『水の洞窟』が開館し、映像を駆使して運河の歴史や自然を紹介している。周囲の土手とひと続きとなった自然環境に調和した洞窟型の記念館で、雄大な北上川と運河を展望しながら開削にかかわった人や川と運河の歴史が学

べ、カップルのデートスポットや家族連れの散策にも最適である。

市民の夢を乗せて始動

いま、日本人には、ゆとりとやすらぎを希求する自然回帰志向が高まってきている。川に親しみ、川と共生しながら、川の清流を守



キャナルネットによる運河のライトアップ

つていこうという雰囲気がある。

往時は、荷物を満載した船が行き交いにぎわった北上川と北上運河。時が移り、もうそのにぎわいを見ることはできないが、時代を駆け抜けた先人たちの思いが、今も変わらず息づいているようである。モノを運ぶ役目を終えた川と運河は、市民の夢を乗せ、再び動き始めた。



整備された北上運河周辺

好評だった全国水の郷サミット 水道の二トン二円運動を展開



清川村総務部長
石川 隆

清川村は首都五十^〇圏、神奈川の屋根と言われる丹沢大山国定公園の東部に位置し、人口は三千二百六十人余と県下唯一の村で、自然の宝庫として貴重な存在である。

村の面積は七十二平方^キで、その九三%が山林。保水力の高いブナ原生林や雑木林も多く、それらが清流の源となつて、流れ出る一滴の水が沢そして川となり、山紫水明な溪谷美を形づくりながら田や畑を潤し、貴重な生活用水になっている。

村の総合計画は、自然を賞び、愛し、その環境を守ることを理念に掲げ、「水と緑の心の源流郷」を目指している。

首都圏一の宮ヶ瀬ダム

村内には、北へ流れる中津川と南へ流れる小鮎川の二河川があり、建設省（現国土交通省）は昭和四十四年、かつては「関東の耶馬溪」といわれた中津川に、宮ヶ瀬ダムを建設する計画を発表した。

総貯水量約二億^リ。首都圏一の多目的ダムで、これによって生まれた宮ヶ瀬湖は、箱根

の「芦ノ湖」

と同じぐらいの大きさであり、計画発表以来

三十一年の

年月を経て、平成十

二年度によ

うやく完成した。

この宮ヶ瀬湖誕生による観光立村と地域の活性化を促すために、湖畔の水没移転商業地帯を「水の郷」と命名し、多彩なイベントを展開して年間三百万人の入込客を迎えている。こうした活動が評価され八年三月、村全域が国土庁（当時）から「水の郷」として認定を受けた。

昨年十月十九、二十日の両日には、県内で同じく水の郷に認定されている南足柄市と共に「全国水の郷サミット」を開催、全国各地から関係者が集まり、大好評だった。



復元された「ふるさとの水車小屋」

この水の郷づくりに、人びとが求める自然の趣、ふるさとの情感を表すための修景施設の一つとして、幾つかの水車小屋の復元を計画している。将来に向けて、ホタルの生息など、水環境・生態系の回復保全を図りながら、自然な温かみを演出する憩いの場としても、水の郷のシンボルにしたいと思っている。

大がかりな下水浄化施設

また、山口静雄村長は、「下流域で利用する飲料水の水質保全は、源流域での当然の責務である」として、二年から公共下水道の整備に取り組んでいる。

九年秋に一部供用開始された下水浄化施設は、周辺環境に配慮して山の中にトンネルを掘り建設した。

総事業費は約百三十二億円を見込んでいる。村の今年度の一般会計予算は約二十二億円、いかに水質保全のために努力しているかご理解願えると思う。

こうした水源地域での努力を、都市地域の人びとに広く知っていただくことと、上下流



誕生の喜びと昇天の悲嘆にくれる青龍

域の交流を深めるために実施しているイベントの一部を紹介したい。

十年のながわ・ゆめ国体で、宮ヶ瀬湖がカヌー会場と決まったのを機に、多くのひとに水に親しんでもらうためのカヌー教室を開催して好評を得ている。

また、上下流域の交流と水源地域の森林の保全育成を図るために、八年から村営水道使用量一トにつき一円分を水道会計から支出。これを原資に、小学生以上の親子を対象に

「森といっしょに」と銘打ち、遊びを通して植樹、下草刈り、枝打ち、炭焼き体験などの「一トン一円運動」を展開している。事業費は約五十万円で例年、五十組近くが参加する。地元は四分の一くらいで横浜市からもこのイベントに加わるという。

雨の青龍祭

夏真っ盛りの八月には、江戸中期ごろから昭和の初めにかけて数回行われたという、雨ごいの龍を再現した「青龍祭」がある。

梅雨明けの七月半ばころから、老若男女の有志が集まり、小中学生に指導しながら竹を使って蛇籠を編み、稲わらとかやで龍を製作する。

祭り当日は、三十人近くの打ち方による青龍太鼓が轟く中、全長二十メートルの雌雄の龍が会場内を勇壮に練り歩き、最後は火を放って昇天させる。元祖が雨ごいだったせいか本当に大雨になったり、雷が落ちたこともある。

紅葉の美しさが宮ヶ瀬湖に照り映える秋には、湖畔を利用して「やまびこマラソン大会」を行う。親子の参加による一・五キロをはじめ、三・五・十・十五キロの四種目が行われ、毎年県内外から四百人前後が参加する。

十二月になると、「クリスマスみんなのつどい」を開催する。自然木である高さ約三十分ほどの「モミの木」が主役。一万個で電飾

された日本一のクリスマスツリーが宮ヶ瀬湖畔に燦然と浮かび上がる。

この期間中は、アメリカ人が祖国からサンタクロースとして来日して来場者を楽しませたり、多彩な行事を繰り広げて三十万人近くの人びとを魅了する。

水源地域からの発信

以上、数多い中からほんの幾つかを紹介したが、このほかにも宮ヶ瀬ダム周辺振興財団主催のものもあって、年間を通して大から小まで五十に近いイベントを行っており、これらのすべてが「水源地域から」の発信である。

自然の力を侮らず、自然を貴び、自然を愛することは大切だ。

荒れた田畑も花を咲かせれば美しい田園風景となるだろう。

美しい自然を子供に伝えるのは大人の責任で、子供たちには、自然の美しさに素直に感動できる人間に育って欲しいと思う。

二十一世紀は「環境と福祉の時代」であり、美しい自然とその環境を守っていくことが今後の課題であることを思えば、水源の森林はごくみ、清流の保全の使命を担う水源地域と、それらの受益者である都市地域の参加とさらなる交流を通して、お互いの理解をもっともっと深め合い、希望に満ちた美しい二十一世紀を次世代に伝えていきたいものだ。

潟の自然保護で文化基金創設 重要な役割担う写真の存在



ビュー福島潟館長
清水重蔵

自然の宝庫

豊栄市は県都新潟市に隣接するベッドタウンで、市のシンボルである福島潟は、「二十世紀に残したい日本の自然百選」「全国水の郷百選」「日本の音風景百選」「日本の美しい村」にそれぞれ選ばれている。

市の鳥で国の天然記念物オヒシクイ約五千七百羽が渡来する日本一の越冬地であり、白鳥や二百二十種の野鳥が確認されている。また、日本の植物の中で最大葉といわれ絶滅の危機にあるオニバスは市の花にもなっている。ほかにもミクリ、アサザなどの貴重種を含む三百五十種類の植物が見られる自然の宝庫でもある。

人と水との共生を追求する豊栄市は、福島潟の自然環境を保全、復元し、後世に残すため、自治省（現総務省）のリーディングプロジェクトの指定を受け、平成九年に水の公園「福島潟」をオープンさせた。自然と文化は車の両輪と同じとの新しいコンセプトで運営している。初代名誉館長には、自然科学系で

なく作曲家の三枝成彰氏を迎えた。現在の二代名誉館長は日本を代表する風景写真家の竹内敏信氏だ。

福島潟の自然保護活動の原動力ともなったのは難しい調査や報告書ではなく、変わりいく潟を記録した写真である。自然保護を写真を通して感性に訴えようと、十一年度「ほんかい自然写真学校」を開校した。

この写真学校は技術だけでなくマナーも教え、以心・伝心・写心を校風に掲げ、自然写真文化の向上も目指している。

自主的運営目指す写真学校

第一回は、全国から三百人の写真愛好者が参加し二泊三日の全寮制で夏に、第二回は二百人で冬に開校し九州や北海道からも学生が集まった。

一回目の運営は地元的女性愛好者が写真学校設立期成同盟を組織し、市と協力しながら開催したが次回からは、参加者が学生自治会を結成し自主的な運営を目指している。

また、地元の農家のお母さんたちや料理組

合などのスタッフやボランティアと、全国から参加の学生たちとの交流も始まった。

写真学校開校と同時に、民間の協力を得て創設した「日本海自然写真大賞」は、自然をテーマに、地方から日本の写真文化の向上を図ろうという具体策でもある。

福島潟では、その後も自然写真愛好者が三脚を立てる姿は日増しに増え、風景写真の人氣スポットになっている。

写真を自然保護の重要な役割と位置付け、写真展や講座などさまざまな写真関連事業を実施している福島潟では、「ごみすてるな」の看板がなくても、フィルム空き缶や帯封などが捨てられることもなく、マナーが守られモデル的な撮影地となっている。

写真学校に合わせて中学生フォトコンテストも実施している。今後は公募を県内に広げ、将来は、全国規模の中学生フォトコンテストに発展させ、総合学習にも写真を生かしていきたい。

水の公園福島潟は、市の直営で運営しているが、将来的には市民が管理運営することを

目指している。市民団体「ねっとわーく福島潟」もオープンと同時にスタートした。

行政も市民も対等の関係でパートナーシップでやりましよう、補助金は出さず、ビューショップを市民団体が経営し、その利益を自然保護活動に役立てるということでさまざまな活動を展開している。

行政は、ショップの場所の無料提供を行うとともに、市民団体の皆さんが自ら判断し、主体性を発揮した活動ができるよう心掛けている。市民団体はたんなる行政の補完ではなく、あくまでも対等の立場で事業の共催やボランティアなどさまざまな場面において、協力し合うことだと思う。

注目される豊栄方式

福島潟の自然保護や文化振興のために使おうと、十二年度に創設した「福島潟自然文化基金」には、一年間で約二千九百人から三百六十万円の善意が寄せられた。このうち三割は市外の方だ。大人は千円、子供は五百円以上、同基金に寄付すると、「ビュー福島潟」年間利用券をプレゼントし、集まった寄付金と同額を市も積み立てている。

「福島潟自然文化基金」という市民参画を進める、豊栄方式ともいえる自然保護の新しい試みに、多くの期待と善意が寄せられており、全国の自然保護団体からも注目されている。

基金を具体的に何に使うかはもちろん、だが決定し、いつ実行するのかも未定。決まっているのはパンフレット印刷費や連絡の経費のみ。行政も、市民団体も、市民も同じテーブルに着き、お互いが知恵を出し合いながら協議を進めている。

市民参画がこれからは不可欠といわれる中、本当の市民参画とは何かが行政にも市民にも、まだ確かな姿が見えてこないのが現状だろうと思う。基金の活用は市民参画のあるべき姿を自らの実践で学び取ることもあると考えている。

国際的に重要な湿地を指定・登録し、湿地や生息・生育する動植物の保全、賢明な利用の促進を目的とするラムサール条約には、自然愛好者や国県などの強い勧めもあるがまだ福島潟は加盟していない。

条約や規則などで網をかぶせて住民を変えていこうというのは前近代的である。

ラムサール条約自体に反対するものではなく賛成であるが、その前に「市民がつくる自然憲章」を制定し、平成十七年の第九回ラムサール条約締結国会議までには加盟をしたいと目標に置いている。

人間が生きていくうえでの永遠の義務ともいえる自然保護は、今を生きている人たちがすべての結論を出すことではない。賢明な判断も時代によって大きく変化する。悠久とも

いえる自然との付き合いは、長期的なスパンで考えていかなければならないであろう。

オオヒシクイの教訓

当市はオオヒシクイの日本一の越冬地であるが、越冬するから野鳥の町では有り得ない。野鳥を愛し、自然を愛する人たちがたくさんいてこそ野鳥の町と言える。

市と市民が共同でロシアのカムチャッカに調査団を派遣して、オオヒシクイの繁殖地を発見することができた。

おかげで、越冬地の福島潟だけでなく、ロシアの繁殖地も守ることが大切であり、またグローバルな自然保護をオオヒシクイから学ぶことができた。

自然を守るということは環境を守るだけでなく、人づくりであり、まちづくりであることを実感した。地球の財産福島潟の自然を守ることが、豊栄市の役割であり、楽しみであること、遅々たる歩みが大きな目標の第一歩につながっていることを確信しつつ、全国に自然文化情報を発信し続けたい。



オオヒシクイ



水の駅・ビュー福島潟

環境に配慮した人にやさしいまち 自然を生かした水と湯の郷



長島町建設部長
不破九二生

恵みと被害もたらした木曾三川

長島町は濃尾平野を流れる木曾・長良・揖斐の木曾三川の河口デルタにできた輪中の町である。三川が運んだ肥よくな土砂と豊富な水は農業を主体とした産業に大きな恵みを与えたが、川のはんらんは逆に町に未曾有の災害をもたらした。昭和三十四年の伊勢湾台風では高潮と洪水が重なり、壊滅的な被害に遭った。

また、経済の高度成長に伴って濃尾平野の地下水利用が進むにつれ大きな地盤沈下をもたらし、低い土地は一層低くなり、町全体が海抜0以下になった。河川には伊勢湾の海水が逆流して塩害をもたらし、まさに水との闘いの歴史の中で、いかに安心して住める町にするかが行政の最大の課題だった。

こうした中、治水・利水を目的にした長良川河口堰の建設が計画された。堤防の改修事業や排水対策が並行して進められ、平成七年に完成すると安全度は高くなった。

長島町は、南北十二キロの細長い町域に国道

1、23号、東名阪自動車道、そして十四年春に開通予定の第二名神高速道路、また、JR関西線、近鉄名古屋線が横断し交通の要衝でもある。昭和三十八年に開業した長島温泉は、今年年間五百万人もの観光客を迎え観光の町としてその様相を変えつつある。

水郷県立自然公園、国営木曾三川公園に指定された長島町は、二十一世紀を迎えた新しいまちづくりのため、水と闘ってきた町から、水を生かした人にやさしい町に、「安全・安心なまちづくり」から「環境を配慮した人にやさしいまちづくり」へと軸足を移行、より潤いある「水と湯の郷長島」を実現しようと考えている。

歴史・産業の情報発信拠点

町特有の「輪中」をテーマに、郷土の歴史・文化・産業に親しみ、心の豊かさをはぐくむとともに、地域産業の活性化を図る場として、「輪中の郷」がつけられた。

この「輪中の郷」建設事業は、国のふるさと創生事業の一億円を財源に郷土資料館造り

から始まり、それに農業構造改善事業やふるさとづくり推進事業を合わせて複合施設を建設した。施設の内容は町の歴史や芸能などを紹介するシアターと展示室、各種会議や研修会ができるコンベンションホール、特産品の加工やサークル活動に利用できる調理室、ノリの手作り体験室、アンテナショップなど。

施設の外には約二畝の農地を借り上げ、サツマイモ、ジャガイモ、トウモロコシ、なばな（菜の花の芽）長島特産）などを有機栽培で育て、そのもぎ取りが体験できる農園を併設した。

今日「輪中の郷」には、町内はもとより、東海地方の子供たちや家族連れが年間約十万人訪れ、長島輪中の歴史を学んだり、農園で

輪中の郷体験農園でのなばなつみ



土にまみれてサツマイモ掘りなどを体験したり、歴史と自然に触れ合う貴重なひと時を過ごせる機会を提供している。

潤いある水辺空間の創造

長島町は低湿地帯であり、湿田と塩分を含んだ地下水に悩まされてきた。こうしたことから深い排水路と農業用水のバイライン化



せせらぎ水路

によって水田農業を進めてきた。この排水路は農業用排水路だけでなく家庭用雑排水の排水路としても利用されてきた。そのためヘドロがたまり環境悪化が進んでいる。そこで、公共下水道事業によって家庭用雑排水の流入がなくなった排水路を人にやさしい水路にしようと、住宅地に隣接した通学路沿いの水路を選び、県営水環境整備事業として、せせら

ぎ水路の整備に取り組んでいる。

一部完成した水路には長島産の金魚などを放流し、今では子供たちが水と戯れ、より身近な水辺空間として、また、維持管理を通して地域住民の触れ合いの場として新たな水辺空間の創造が始まっている。

長島町は国土庁(当時)の「水の郷百選」に認定されたのを機に輪中特有の景観と住民の水のかかわりを再認識するようになった。

町の中央を流れる「長島川」は江戸時代、長島城のお堀として、また、城から東海道七里の渡しにつながる船運の河川として利用され、その後、昭和三十年ごろまでは住民の生活用水や憩いの空間として親しまれてきた。

しかし、高度成長時代に入ると、きれいな川が排水路と化した。そこで、公共下水道の供用開始に合わせ、町内、町外多くの人たちが安らぎを感じる水の郷にふさわしいきれいな河川にしようと、行政機関と地域住民が一体となって活動を起こした。ボランティアの集まり「長島川をきれいにする会」が平成十二年度に発足し、手始めに河川沿いに花の咲く樹木の植栽をしたり、先進地を視察した。今後は、河川の美化活動を通じて、人にやさしい環境づくりを住民本位で進めていくとともに、人にやさしい水辺の散策路やビオトープを住民参加のもとに建設していこうと計画を進めている。

なばなの里の開園

長島町に昭和三十八年、摂氏六十度の温泉が湧出し、これを利用したレジャーランドが開業した。事業拡大を目論んでいた平成七年、長良川河口堰が完成した。新たな観光スポットが誕生したため、この工事用地を利用して、長良川水辺の夢のような小さな村をコンセプトに「なばなの里」を建設することとなった。



ここは、地権者が企業に土地を提供(借地)し、水と緑あふれる空間にベゴニア温室や各種飲食店、売店、花の広場などを配置し、官民が一体となって環

境にやさしいまちづくりを進めた事業として、年間約二百万人の集客を見る施設として脚光を浴びるようになった。

こうして、「水と湯の郷長島」の名が全国に広まり、より多くの人たちが長島町を訪れ、自然や近代的なレジャーを楽しみ、長島に行けば安らぎと生きがいを感じると言っていただけの町を目指して、今後ともまちづくりを進めていきたい。

公共下水道事業、16年度の完成目指す 清流を守る「川の都」づくり



上郡町企画財政課主事
小林 幸生

鮎釣りのメッカ、千種川

上郡町は、兵庫県の南西部に位置し、西は岡山県境に接する県内最西端のまちである。古くは、山陽道や因幡街道の要衝として栄え、南北朝時代の武将・赤松円心の里としても知られ、数多くの歴史と文化遺産を残している。

また、まちの中央を南北に清流「千種川」が流れ、当町の自然を語るうえで、欠かすことができないものとなっている。

この千種川は、兵庫・鳥取県境付近にそびえる三室山に源を発し、赤穂市で瀬戸内海へと抜ける全長六七・六^{キロ}の河川で、上郡の人びとは、古くからこの川の恩恵を受けてきた。豊かな水量と良質の水を誇り、四季の移ろいの中で、さまざまな風景を私たちに見せてくれる千種川。米、野菜、果実など上郡で育つ農作物は、この川がもたらした肥よくな大地によって、はぐくまれたといっても過言ではない。この川は、鮎釣りのメッカとしても知られ、毎年五月下旬に鮎漁が解禁になると、鮎を求めて各地から、多くの人が上郡を訪れる。

この川の持つ素晴らしさが評価され、千種川は「全国名水百選」に、また、上郡町は周囲を豊かな自然に囲まれた水と緑のまちとして、「全国水の郷百選」にも選ばれた。この美しい清流を保全し、後世に守り伝えるため、当町では、地域ぐるみでさまざまな活動に取り組んでいる。

水質保全で4事業

まず、行政サイドは、千種川の水質保全を図るため、生活排水処理施設整備事業に取り組み、平成四年三月に生活排水処理計画を策定した。現在、公共下水道事業、農業集落排水事業、コミュニティプラント、小型合併浄化槽の四事業を推進している。公共下水道事業では、十一年度に「上郡浄化センター」が完成し、事業認可面積三百九十九^{ヘクタール}のうち、十二年度末で面整備が約五〇％、供用も約五〇％の事業進捗率となり、十六年度の完成に向け事業を進めている。

農業集落排水事業は、事業計画十一地区のうち九地区で供用開始し、残りの二地区は、十三年度と十四年度にそれぞれ完了の予定で、生活排水処理施設の整備充実について、見通しがついてきた。

また、地域の資源や歴史を掘り起こし、新しい文化をはぐくんでいくための呼び水として、ふるさとの歴史や伝説、名所などを分かりやすく紹介した、『ふるさと上郡のあゆみ』

千種川と川まつり「花火大会」



『ふるさとを訪ねて』の二種類の冊子を作成した。その内容について、若干紹介したい。

潤いと安らぎ与えるため池と堰

千種川とその支流沿いに細長く点在した集落では、川沿いの肥よくな土地を利用し、古くから稲作を中心とした農業が盛んに営まれ、その農業用水を確保するため、ため池や井堰が築かれてきた。その数はため池が四百、堰は百五十にも及んでいる。そして、それらは農業用としてだけではなく、地域の人びとに潤いと安らぎを与える身近な水辺空間として、今もなお大切に守られている。

とくにため池の中には、江戸時代、忠臣蔵で有名な赤穂藩主・浅野内匠頭によって造られ、若い娘の人柱伝説が残る風光明媚な「鳳宮池」や、周囲の公園化が進む兵庫百景の一つ「山野里大池」などがあり、四季を通じて多くの人びとに親しまれている。さらに、河童の証文・落岩伝説など多くの歴史や伝説を伝え、今も鮎の名所として知られる千種川や数々の井堰群は、漁場や憩いの場として、水を求める人びとに貴重な親水空間を提供している。

現在では、この二種類の冊子に書かれた親水空間以外にも、千種川親水公園が整備されたほか、新しい水源として完成した安室ダム、現在、建設中の金出地ダムなど、より一層水

辺に親しむための空間も、整備されつつある。

このほか、毎年七月末ごろには、川の恵みに感謝し、川に親しむ夏祭りとして、『川の都』かみごおり川まつり」を開催し、水上運動会・鮎つかみどり、盆踊り大会、花火大会など、多彩な行事が行われている。また、千種川中流域の五町（上郡町・佐用町・上月町・三日月町・南光町）では、川を生かしたまちづくりの調査、研究を行うことを目的に、『千種川流域（赤佐）まちづくり協議会』が発足し、今後のまちづくりのあり方などについて、検討を重ねている。

活発な住民活動

住民の取り組みをみると、従来より、川に対するこの地域の住民の意識は非常に高く、石礫使用運動、廃油回収運動、ため池や河川の清掃活動などが、活発に行われている。また、十年度からは、河川の保全などを行うには、流域全体での取り組みも必要なことから、千種川流域の二市六町（赤穂市・相生市・上郡町・佐用町・上月町・三日月町・南光町・千種町）の住民が、自らの手でこの清流を保全していくことを目的に、『清流千種川地域づくり会議』を発足させた。上流での保水能力を高めるための植樹、下草刈りや流域全体で河川清掃を実施するなど、さまざまな活動に取り組んでいる。

このほか、毎年七月二十日（海の日）には、住民自らの手により、森と湖に親しむイベントとして、『安室ダムまつり』が開催され、ダム見学会、カヌー教室、鮎つかみどりなど多彩な行事が行われている。

このように、千種川は、地域に密着したかけがえのない資源となっており、この貴重な資源を守るためには、行政と住民との連携が必要不可欠となっている。今後、より一層、行政と住民が連携を図り、この清流を地域ぐるみで保全し、後世に守り伝えるため、さらに水との深いかかわりを持ちながら、『川の都』づくりを進めていきたいと考えている。



川まつり「水上運動会」

身近な水辺の保全と創造目指して 関心高い市民意識

親水整備事業の草分け

岡山市は、旭川・吉井川などの大河川をはじめ、平野内を縦横に張り巡らされた水路群、瀬戸内海、千を超えるため池など、さまざまな表情の水辺に恵まれている。そして、このような水辺によってもたらされる肥沃な土地と豊かな恵みをより所として人びとの生活が営まれ、吉備の穴海^{あなうみ}を中心に栄えた古代吉備文化以来、岡山のまちづくり^{まちづくり}に人びとの生活と水辺は深くかかわり、独自の環境が形づくられてきた。

本市では、このように昔から水とのかかわりが大きかったことから、意識調査などの結果でも市民の水辺への関心が高く、また、水辺の整備にも早くから取り組んできた。わが国の親水整備の草分けとして知られている「西川緑道公園」をはじめ、岡山城・後楽園周辺の旭川沿岸や百間川、市内の水路群、ため池、冷泉など、多くの水辺で親水公園事業や景観整備事業などが進められている。

ところで、本市には、現在でも、国の天然記念物のアユモドキや絶滅が危ぐされるスイゲンゼニタナゴ、古来より多くの人びとに愛され続けてきたホタルなどが生息する、豊かな水辺が市街地中心部近くにも維持されている。

このような豊かな水辺は、いわゆる原生自然地とは異なり、私たちの先人たちが、伝統的な農耕を中心とした生活の中で築き上げてきた環境であり、かつては、全国どこにでも見られた「ありふれた」ものだった。しかし近年、全国的に失われていく傾向にある。

幸いなことに、本市は、全国でも有数の農業が盛んな都市である。これに利用される水を確保するため、多くの人びとによるたゆまぬ営みが、このような他の都市にはまれな、豊かな水辺を維持できた要因と考えられる。

環境保全条例の制定

しかし、本市においても、水辺の管理の担い手としての農業従事者は減少を続けており、また、利水や治水事業などに伴う水路のコンクリート化、生活排水による水質汚濁な

どで、水辺の自然の喪失や水辺景観の画一化などが進んでいる。

このため、今後とも、本市の豊かな水環境を維持していくためには、現在の社会経済システムに応じた、新たな水辺管理システムづくりが求められる。

このようなことから、市民や事業者などとの連携により、豊かな水辺環境を保全、創造することを目指して、「岡山市環境基本計画」の策定や、「岡山市環境保全条例」を制定するとともに、現在、その推進のため、以下のような事業、施策に取り組んでいる。

① 環境配慮情報などの整備

開発時などにおける計画段階からの適切な環境への配慮を促すことを目的に、岡山市環境配慮情報図を作成し、それをもとに環境配慮指針の作成に取り組んでいる。

② 児島湖流域における生活排水対策

全国的に見ても汚濁の進んだ児島湖浄化のため、町内会、婦人会の方などと共に、クリーンネット使用実践地区の指定や児島湖環境保全推進員制度などを設け、自主的で、地道



岡山市環境調整課主事
友延栄一

な生活排水対策を継続してきた。

③ホタルの里事業

市内に百カ所以上残されているホタル生息地の身近な水辺環境を、市民と行政が連携して守り育てていくため、地域内で進められている市民などによる環境保全活動を支援する。また、情報提供により水路改修時などの事業者による環境配慮を促している。

④おかやまエコミュージアムづくり推進事業

岡山市環境基本計画のリーディングプロジェクトとして、住民と行政が協力しながら地域の有形、無形の環境資源（自然、歴史的遺産、地域の伝統的な暮らしなど）を保全、活

用しながら、環境保全型のまちづくりを行っていく事業を進めている。

活発な市民の環境保全運動

このほかにも、とくに天然記念物アユモドキの保護増殖活動を行う岡山淡水魚研究会、河川清掃に取り組むNPO法人「旭川を日本一美しい川に育てる会」、子供たちの環境学習支援や旭川流域の各種団体とのネットワークづくりを行う「旭川流域ネットワーク」など、市民の自主的な水環境保全活動が行われている。

こうした住民の自主的な活動が本市の水環境保全の一翼を担っている。

本市では、今後、水辺をはじめ、市域全般の環境保全を図っていくためには、これら市民の自主的な活動が果たす役割が、一層重要になることから、平成十三年四月、「環境パートナーシップ事業」を創設した。

環境パートナーシップ事業

これは、岡山市環境保全条例（十二年三月二十二日公布）に基づく一定の手続き（団体などによる届出、市による登録・表彰など）に参加していただくことを通して、その緩やかな組織化を図る一方、各参加団体間の情報の共有化や、交流の場を提供することなどを通じ、市民などによる自主的な環境保全活動

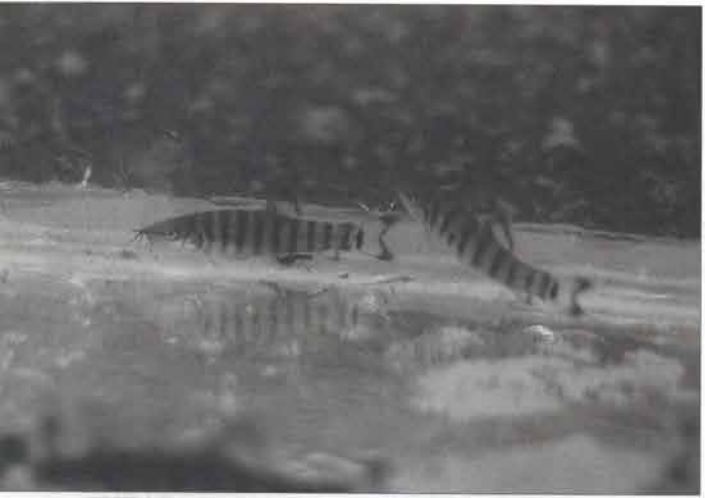
を支援していくことを目指すものだ。

本市の水環境は、多くの市民による日々の営みや保全活動によってはぐくまれている。これらの身近な環境を守り育てる活動を市民、企業、行政が協働で持続していくことが、アユモドキなどのすむ豊かな水辺環境の保全と、出会いと触れ合いのある良好な水辺空間の創出につながると考えられる。

このため、新たに始めた環境パートナーシップ事業をもとに、すべての人の参加による身近な水辺の保全と創造に関する活動の輪が、全市的に広がっていくことを目指していきたい。



児島湖清掃大作戦



天然記念物のアユモドキ

私

が初めて建設省(当時)の課長に就任したころは、道路公害がやかましく指摘されていたときだ。マスコミもよくカー運動を報じていた。道路公害訴訟が各所で提訴されており、環境庁の前には毎日「怨念」の幟(のぼり)がはためいていた。こうした中で、第八次道路整備五カ年計画の策定に当たり公害対策を積極的に取り上げようと道路整備緊急措置法の改正を行い、「生活環境に資すること」を道路整備の目的として明確にした。

あるとき道路整備の現地に赴き

幹線道路の両側に高い防音壁と樹木が植えられ、街が分断されている状況を見て驚いた。これでは街が死んでしまう。もっと根本的な対策の必要性を痛感した。建設省でも「局あつて省なし」とよくや

ゆされていた。私は早速、道路行政に都市行政を導入することを計画した。幹線道路の沿道を都市計画の手法で整備し、公害、とくに騒音の被害の少ない街づくりを進めようとした。それが昭和五十五年に制定された「幹線道路の沿道の整備に関する法律」である。

この法律では、交通騒音の著しい幹線道路を「沿道整備道路」に指定し、これと一体的に市街地を整備する沿道区域に都市計画の沿道整備計画を定め、沿道に緩衝建築

物(バッファー・ビル)や緩衝緑地などを誘致しようとするものである。また、これに必要な土地の買い入れや緩衝建築物の建設には国費を投入することとした。これで東京の環七や環八道路の整備が進められた(この制度がなかなか定着しないため、平成八年には運用を緩和するための改正がなされている)。

ところで、わが国では街づくりがどうも下手だ。とくに戦後の個人の権利意識が過剰なのかもしれない。経済計画、これに基づく総

これがらの街づくり



山本重三

(財)地域開発研究所理事長

合開発計画、首都圏整備計画などは整合性を

もって定められてきたが、個々の事業となるとバラバラである。東京の都心の六本木界限はその典型であろう。ここでは昭和三十九年のオリンピックの開催を目指して六本木通りが拡幅され、そのセンターに首都高速の高架道路が整備された。

しかし、そのため、街の景観は台なしにされた。どこの国でも街の真ん中を高架道路が走っているのを見たことがない。周辺では小

区画の土地にペンシルビルが軒を連ね、しかもてんからバラバラの形と色で建っている。外国から帰ってくるとその異様に驚かされる。日本の都市計画ももつこのへんに配慮する必要がある。高度成長期からほぼ四十年が過ぎた今、日本の街づくりも美観を考えて街の再生を図るべきと考える。

昭和五十一年のことだったと思う。北イタリアで大地震があり、アルプス沿いの十二、三世紀にできた都市が壊滅的被害を受けた。

私は政府調査団の一員として現地調査に赴いた。議会では連日のように復興計画について議論され、復興資金として自動車に税金が掛けられていた。現地ではEC各国から援助としてプレハブ住宅が提供され、空き地に街並みが整備されていった。

説明によると「何年かかるか分からないが、昔の街並みを完全に復旧することとしており、住んでいる人の多くは戻れないだろう」と言うのに驚いた。欧米ではこのような街づくりが人びとの考えにあるということを知り、大変感銘した。二十一世紀を迎え、日本でも単に便利さを追求するだけでなく、美しく、快適な街づくりを考えていきたいものである。

第5回

(財)地域活性化センターと全国の58新聞社共催の「第5回ふるさとイベント大賞」が決まり、
創意と工夫に富む9つの地域 イベントが表彰された。

ふるさとイベント大賞

(36頁参照)



大賞

大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2000(第1回)

新潟県十日町地域広域事務組合(十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町)

●主催団体=越後妻有大地の芸術祭実行委員会 ●開催日=平成12年7月20日~9月10日 ●開催場所=越後妻有地域全域 ●観客動員数=162,800人



優秀賞

第7回ゲタリンピック2000 広島県福山市

●主催団体=ゲタリンピック実行委員会●開催日=平成12年9月10日●開催場所=JR松永駅周辺●観客動員数=85,000人



優秀賞

長崎ランタンフェスティバル(第7回) 長崎県長崎市

●主催団体=長崎ランタンフェスティバル実行委員会●開催日=平成12年2月5日~19日●開催場所=湊公園ほか●観客動員数=690,000人



部門賞

文化・交流部門

全国子供歌舞伎フェスティバルin小松(第2回) 石川県小松市

●主催団体=全国子供歌舞伎フェスティバルin小松実行委員会●開催日=平成12年5月13日～16日●開催場所=小松市公会堂ほか●観客動員数=14,800人

**部門賞**

祭・スポーツ部門

源平火牛祭り(第11回) 富山県小矢部市

●主催団体=メルヘン市民委員会●開催日=平成12年7月29日～30日●開催場所=石動駅前商店街●観客動員数=20,000人

**部門賞**

地域経済振興部門

大船渡・かがり火まつり(第5回) 岩手県大船渡市

●主催団体=大船渡・かがり火まつり実行委員会●開催日=平成12年7月29日～30日●開催場所=大船渡港茶屋前岸壁ほか●観客動員数=41,000人



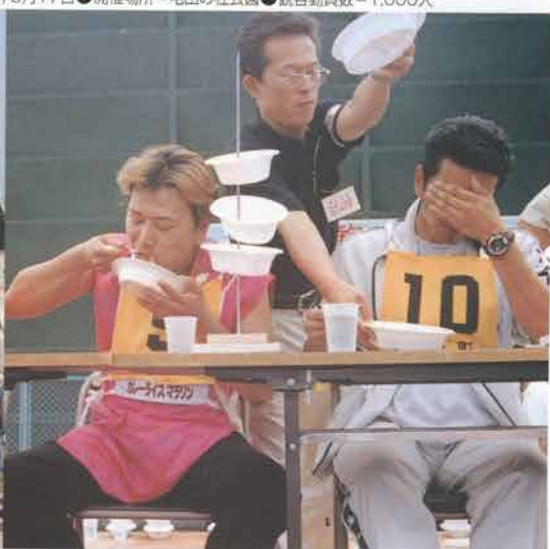
GET21なんかん 音と光のカウントダウン2001(第2回) 熊本県南関町

●主催団体=GET21なんかん音と光のカウントダウン実行委員会●開催日=平成12年12月31日~平成13年1月1日●開催場所=大津山公園一帯●観客動員数=3,000人

選考委員
特別賞

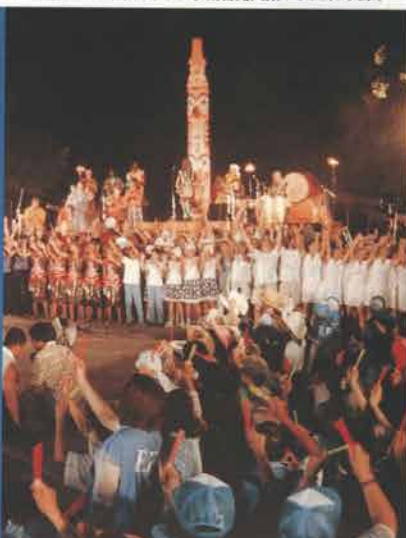
たんのカレーライスマラソン(第15回) 北海道端野町

●主催団体=たんのカレーライスマラソン実行委員会●開催日=平成12年9月17日●開催場所=屯田の杜公園●観客動員数=1,000人

選考委員
特別賞

西暦2000年世界民族芸能祭 ミワッショイ! 2000(第1回) 大阪府堺市

●主催団体=西暦2000年世界民族芸能祭組織委員会●開催日=平成12年7月28日~8月6日●開催場所=大仙公園ほか●観客動員数=396,198人



「入口」には、だれもがあれこれ気を遣う。

「出口」には、それほど関心を持たない。

新築の家の話ではなく、街づくりに取り組む人たちの「トイレ」への関心度である。

全国どこでも中心市街地の空洞化や商店街の衰退から、かつてのにぎわう街の顔を復活させよう、とさまざまな活動を行っている。

「出口」こそ街づくりのカナメ



福島民報社
取締役論説委員長
渡辺 紀士見

その中で、誤解を恐れずに正直言って「トイレ」には「臭いものには蓋」にならうか、口までも閉ざし活動も鈍い。

街づくりの熱心な土地へ研修視察に行っても見学と説明の時間に縛られ、生理現象をこらえる。苦悶の表情に歯をくいしばり脂汗を流して、あちこち見て回っても収穫は少ない

のではないだろうか。

少子高齢化社会の到来が声高に叫ばれて随分たつ。とくに少子高齢のうちの高齢な方々を失礼ながら「トイレ弱者」と呼んでもいい。

「トイレ弱者」とは、いくら健康そうに見えてもトイレ使用の頻度が多かったり、普通のトイレでは利用困難だったりする人を言う。中でも体が不自由な人、妊婦、よちよち歩きの子供たちをもっと困る。

二百年も続く江戸風の町並みにある和菓子の店で品選び中に「生理的現象」が襲ってきたとき、「気軽に、どこでも、いつでも、だれでも」入れる公衆トイレは意外と存在していない。

大体、公衆トイレはだれが設置し、だれが清掃し、どこが管理するのか。みんなトイレのことを知らな過ぎるのではないか。だから照明が壊されても、壁に落書きされても、それを解決したり改善、修理しようという動きにつながっていない。

少子高齢化社会で国も自治体も多くの予算をつけるべきは「公衆トイレ建設費」である。建物の形、姿は土地土地に合ったものであればいい。肝心なのは「トイレ」とすぐ分かる全国統一の標識にすることである。身近な例として挙げれば交通標識である。「青・黄・赤」の信号機。丸形の赤地の真ん中に横一直

線の白く太い線があれば「進入禁止」の標識。全国どこへ行っても同じである。同時に「トイレ法」というきちんとした法律を制定すべき、と強調しておきたい。

不平不満ばかり述べてきたが、街のトイレについて拍手を送りたい快挙の事例を一つお示ししておく。

福島県いわき市の県建築士いわき支部と、いわき女性建

築士の会の会員が仕事の合間に足で歩いて調査、作成した「いわきトイレマップ98」と題するガイドブック。全部で二百二十六カ所が地図付きで載っている。とくに、車いす用のス

ロープや専用駐車場の有無。介護協力は受けられるか、非常呼び出しは付いているか、洗浄は押しボタン、足踏み、レバー方式、感知式のうちどれか。こういった二十項目が略記号で記されている。

小さな生理的廃棄物の「出口処理場」こそ街づくりのカナメである。



渇水契機に植樹と下刈り 活発な水源の森交流事業



嶺北広域行政事務組合広域政策室長
大石隆彦

暴れ川・四国三郎吉野川

嶺北地域は高知県の北部、四国の中央に位置し、人口約一万七千人。総面積九六五・二四平方キロのうち山林面積が九〇%を占め、四国山地に接する三町二村（本川村、大川村、土佐町、本山町、大豊町）から成る山岳地域である。地域中央を吉野川が流れている。古来から板東太郎（利根川）、筑紫二郎（筑後川）に次いで四国三郎（吉野川）の異名を持ち、暴れ川として有名だ。

吉野川の流域は四国四県にまたがり紀伊水道に注ぎ込まれる。延長百九十四キロ、流域面積は四国全域の二〇%にも及ぶ。一本の沢から始まる雄大な流れは美しい峡谷をつくり、谷間を縫って山を下りながら、流域に肥沃な土壌をもたらした。太古の昔から人やモノ、文化を運ぶ「動脈」として郷土の歴史をつくってきた吉野川は「母なる川」の風格を持ったわが国屈指の大河だ。

嶺北地域には「四国の水がめ」として有名

な「早明浦」ほか四つのダムがある。また徳島県池田町からは「香川用水」として取水されている。

どんぐり銀行と提携

平成六、七年と続けて大規模な渇水に見舞

「香川用水の水源巡りの旅事業」で高松市立勝賀中学280人による植樹（早明浦ダム・大川村）



年四月に全国から八十四人が参加し、一泊二日で植樹祭と田舎体験交流が実施された。八年四月には「どんぐり銀行大川村」を開設し、東京都のハンドベル倶楽部支店、原宿、横浜、鎌倉、京都、大阪、神戸、熊本、高知の各出張所などで預金の受け付け、払い戻しや、

われたことで、水源林の大切さと水資源開発の重要性への関心が高まっている。渇水を契機に、民間でも六年十二月に香川県の「どんぐり銀行」と大川村との間で「交流の森」づくり事業の協定が締結され、七年五月から関係者により毎年植樹と下刈りが行われている。九

大川村の紹介、PRを行っている。預金者数は現在約六千人に上っている。

吉野川の支流瀬戸川から高知分水が取水されている。十年に「ふるさとの森を育む会」が発足し、稲村ダム周辺で翌年から毎年高知市、地元関係者によって植樹と下刈りが行わ

れている。

国土交通省の事業で水源地域と受益地域の交流促進、水源林保全を図るため、七年五月「早明浦ダム一万本植樹」事業が実施された。八年度から「吉野川水源の森交流事業」が実施され、香川県（香川用水の水源巡りの旅事業）の中学生を対象に年二回の植樹、徳島県（早明浦ダム「命の森づくり」交流事業）の吉野川源水をはぐくむ会などによる年一回の植樹が毎年行われている。

スポーツ交流

八年七月から吉野川水源地域と四国四県受益地域がスポーツなどを通して交流しながら相互に連携し、それぞれに理解を深めている。川や森、湖の大切さを認識することを目的に川の日吉野川スポーツ交流大会が嶺北地域と三好地域（徳島県池田町、山城町、西祖谷山村、東祖谷山村）で一年交替で毎年開催され、Eポートなど四種目で約六百人前後の人たちが交流を深めている。

香川用水の関係で水道週間の一環として行われる高松市の「水源地域への感謝・交流物産展」に毎年参加、高松市の人たちに環境保全や森林のもつ役割、現状を理解してもらっている。また、香川用水の導水元である財田町の香川用水記念公園で開かれる「水口の感謝祭」にも参加、土佐町に伝わる郷土芸能

「土佐柴刈唄」を披露したほか、嶺北地域の物産展示即売も行った。

徳島県の吉野川源水をはぐくむ会（会員約三百人）との間で、七年に「吉野川ウォーキング」、八年には「白髪山原生林を歩く」、九年は「吉野川源流を歩く」交流事業をそれぞれ実施した。また、七年から毎年寄付金（会員一人千円）をいただいている。寄付金は水源林活用のため吉野川流域ネットワーク基金

早明浦ダムのふれあい広場で開催の「やまびこカーニバル」



川の日吉野川スポーツ交流大会でのEポート競技



「高松市水道週間」で水源地域の紹介と特産品展示販売



を進めるなかで、徳島市のNPO法人「新町川を守る会」との交流を深めた。

十三年三月に嶺北地域で「フォーラム吉野川21」を開催し、どんぐりネットワーク、吉野川流域交流塾など四国四県から約百人が参加し、水源の大切さを考える交流会が行われた。新町川を守る会は嶺北地域で「交流の森づくり」を、吉野川源水をはぐくむ会は「森林交付税の創設」を中下流の自治体に働き掛

森林交付税の創設を

として積み立て、基金残高は現在約二百万円。

吉野川上下交流事業は、今までは行政主導型で、しかも下流地域からの情報発信が大半。源流地域からの情報発信が少ないのが現状だ。十一年度に現国土交通省の「参加と連携による地域づくり」事業に高知NPOと共同で応募し、採択された。地域住民と一緒に事業

けを確約するなど一定の成果があった。

嶺北地域は林業後継者難で人工林の手入れが行き届かず、流域全体の自然や治水に影響しかねない状況となっている。「参加と連携」をキーワードに水源を守る「森づくり」「里づくり」「人づくり」を目指して、下流地域や都市地域の人たちとの交流を深め、人の交流から経済的な交流へと発展するよう活動していきたいと思っている。

水源保護地域での掘削禁止 湧水利用で日本一のそうめん流しも

湖水利用のかんがい施設

開聞町は、鹿児島県薩摩半島最南端に位置し、薩摩富士と称され、日本百名山の一つ「開聞岳」標高九百二十二メートルの麓にある。北は九州一の広さを誇る池田湖、南は東シナ海に面し、総面積三三・四五平方キロ、人口約七千三百人の町である。

昭和三十九年には、開聞岳を中心に町の約五七%が霧島屋久国立公園に指定され、県内でも有数の景勝地である。

本町は池田湖を源とする新川、京田先湧水きょうでんせんすいによる宮田川、山崎溜池から流れる馬水川うまみずと豊かな水源に恵まれており、平成八年に鹿児島県内で初めて水の郷百選に認定された。

湖水面の標高六十六メートル、最大水深二百三十三メートルのカルデラ湖である池田湖は、古くから住民生活と密接な関係を持っている。神話伝説が多く、神聖な湖としてその水の利用が恐れられていた。しかし安政四年（一八五七）から水田利用を目的として、時の藩主島津齊彬公の命によりカルデラ外壁の掘削工事が

始まり、明治九年までに延べ十一万人を要して水田八十鈴とかんがい施設が完成した。

湖は天然のダムとして南薩地域二市四町約六千鈴のシラス台地を潤す大規模かんがい用水の水瓶となっている。開聞岳を背景に、畑地かんがいのスプリングラーが描くきらきらと輝く水のアーチは、もうすっかりこの地方の風景になっている。

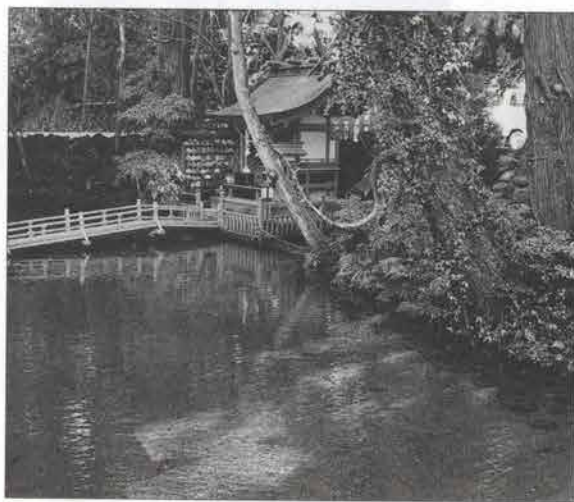
神話の里

開聞町の歴史は遠く神代にさかのぼる。神話の主人公山幸彦が、兄海幸彦の釣針をなくして途方に暮れ、樹上にたたずむ姿が井戸水に映っていると、豊玉姫に見初められたと伝えられる（開聞町郷土史による）。日本最古の井戸「玉乃井」の史跡がある。この神話は、豊玉姫を乙姫と称し、竜宮伝説として伝えられている。

史跡近くにある池田湖からの浸透水といわれる「唐船峡」の水源には水神ミヅハノメ神が祭られ、数千年の間、うぶすなの神のみそぎの水として、また、住民の飲料やかんがいの



開聞町長
上笠兼男



唐船峡湧水と川上水神

用水として使用され、親しまれてきた。

このような歴史を踏まえ、神話の里、竜宮の里づくりを推進している。唐船峡から玉乃井までの用水路においては、利用客が水に親しめるよう親水性護岸、休憩施設、景観施設などの整備を行った。畑地帯には、かんがい用配水管を張り巡らし、高収益性の営農確立を目指している。

町が特許取得

現在、唐船峡の水源の近くでは、湧水量日量十萬ト、水温摂氏十三度の清涼な水を活用した唐船峡そうめん流しが年間五十万人の観光客に利用されている。

これは町が魅力ある観光地づくりのため、



年間50万人の食事客でにぎわう唐船峡そうめん流し

昭和三十三年そうめん流し施設を建設したことに由来する。杉木立の溪谷の清流を利用したそうめん流しは夏の暑さを忘れさせ、たちまち人気の的となった。より企業的な経営とするために当時の助役が研究を進め、水圧を利用する回転式そうめん流し器を完成させた。

この施設は町が特許を取得した。回転式で新鮮な水がクルクルと円卓を回り、これにそうめんを流し、すくいながら食べる。家族的な雰囲気の中で食べられ、かつ衛生的でその斬新

なアイデアが利用客に買われ、全国に広がり、類似施設も多く建設されるようになった。

今や唐船峡は全国的に有名となり、名実共に日本一のそうめん流しとして、指宿観光のメインルート上の拠点として観光客に親しまれるようになった。

その下流では清涼な水質と一定した水温（摂氏十五度）の水を活用してわさび栽培が行われている。このほかにも、摂氏十七〜二十度の水温でチョウザメの試験飼育を実施するなど、豊富な水を利用した新しい産業への試みも盛んになってきている。

条例の制定

唐船峡水源の流域集落では、明治四十四年に取り締まり申し合わせ規約を定め、飲料水への病原菌流入を防ぐための監視を行うなど、水源保護思想を培ってきた。その思想は引き継がれ、水道にかかる水質の汚濁を防止し、正常な水および水量を確保するため水源を保護し、住民の生命、健康を守ることが目的として、開聞町水道水源保護条例を平成六年に制定した。水源保護地域を設け、地域内の産業廃棄物処理業、地下水利用業、掘削を目的とする事業を禁止している。

これにより町民の水源保護への意識が深まり、神代からの水に親しみ、水を守り、水を生かした地域づくりへの取り組みが一層深ま

った。

さらに、十三年三月には、第四次開聞町総合振興計画を策定し、基本理念に「美しい自然、心豊かな人、活力に満ちた生きがいのある町。かいもん」を掲げている。計画では豊かな自然の保護と活用を図りながら、人と自然が共生し、地域の特性を生かして、地域自らの創意工夫による主体的な地域づくりを行う。町民が郷土に誇りと希望を持ち、活力と生きがいのある生活ができるまちづくりを目指している。

特色ある自然や歴史、文化などは観光ニーズそのものであり、これらを生かしながら観光振興を推進している。たとえば、観光イベントを他イベントとの統廃合、廃止により見直しを行っている。年々増加傾向にあるイベントへの町外からの参加者や運営ボランティアは、地域間の交流人口を増加させており、U・J・Iターナー者の定住希望の問い合わせも近年増加している。

過疎化が深刻化している本町にとって、このような地域間の交流は町発展に大きな役割を果たしている。しかし、U・J・Iターナー者に対する助成制度や受け入れ態勢がまだ不十分で、定住希望者の要望などに沿えないのが現状だ。今後、定住を目的とする空き家改修に対する助成や分譲住宅地の整備などを積極的に推進していきたい。

「第一回 地域伝統芸能まつり」の開催について

日本各地に古くから伝わる地域の祭りや能・狂言などの古典芸能を一堂に集めた画期的なイベント「地域伝統芸能まつり」が、二月二十四、二十五の両日、東京都渋谷区のNHKホールで、ジャンボ宝くじの売上金から助成を受けて開催された。今回は、このイベントを紹介したい。

1 イベント開催の経緯

「二十一世紀に向けて、日本の文化的伝統や日本の価値を見つめ直し、日本人のアイデンティティを改めて見直すとともに、地域住民が郷土を愛し、郷土に誇りと親しみを持って地域づくりに取り組む機運を盛り上げる必要がある」との問題意識で、平成十年度に「歴史的遺産・伝統文化の活用による地域おこし懇談会」（梅原猛座長）が設置された。

同懇談会は、歴史的遺産などの活用による地域おこしの意義や、その推進のための具体的なプログラムについて提言を行った。この中で、全国的な機運の高まりにつなげていくためのイベントの開催が提案され、

今回の実施につながった。

2 イベントの目的、準備に当たって

このイベントの開催によって、地域の伝統芸能の大切さについて広く再認識してもらい、地域の祭りの維持保存活動を力づけるとともに、地域の祭りの保存・活用を通じた地域の活性化に関する全国的な機運を盛り上げようというのが、目的である。

準備に当たっては、そのことを十分に踏まえ、たとえば、単に祭りのクライマックスを舞台で披露するだけでなく、地域の祭りを守るため懸命に努力している人びとの姿や、そういう活動を通じて地域の人びとが助け合い、自分たちの足元を見つめ直し、地域の活性化を図ろうとし

ている、その現実の姿を広く伝えていく必要があると考えた。

そのため、制作をお願いしたNHKのクルーには地元取材をこれまで以上に大切にしてもらった。またNHKの過去の映像データも活用し、実演前後に大スクリーンで神事の様子を流したり、地元の方に祭りの趣旨、意義を方言でそのままに語ってもらったり、さまざまな工夫に取り組んでみた。

実行委員会の有職者の方々の意見でも、また当日の会場でのアンケートでも、今後このイベントをさらに意義深いものとしていくため、このような工夫にさらに力を入れていくべきだといった声がたくさん出された。

3 イベントのテーマなど

今回のイベントのテーマは、「怨霊」。無作為に有名な祭りを集めるのではなく、全国の祭りや古典芸能

の通じる「共通テーマ」を拾い出し、そのテーマに沿って代表的な演目を広く集めることにした。

「怨霊」というテーマは、実は先祖の鎮魂といった形で、日本各地に伝わるほとんどすべての祭りの本質につながっている。実行委員会で議論を重ね、今回は、梅原会長の十八番でもあるこの「怨霊」をテーマとすることになった。

初めての取り組みであったことに加え、一般の収益的な興行に比べると広報宣伝の機会がなかなか確保できないため、どれほど観客の応募があるか心配だった。しかし結果的には二日間の定員約六千人に対して二万五千人を上回る応募があるなど、一般の方々の期待の大きさは想像以上だった。

4 当日の模様

イベントは、宇崎竜童作曲、林英哲演奏による勇壮な和太鼓の響きと

ともに開幕。続いて、六三四（むさし）による和洋混交のロックの演奏、そして一日目の出演者全員が舞台に勢揃い。地域の祭りの皆さんと人間国宝・茂山千作氏をはじめとする古典芸能の出演者、舞楽「蘇莫者」の天王寺楽所の方々が一堂に会したオープニングはそれだけでも感動的だった。

「怨霊」をテーマに、二日間にわたって実演された祭りは鬼剣舞（岩手県・北上市）、高千穂の夜神楽（宮崎県・高千穂町）、なまはげ（秋田県・男鹿市）、新居浜太鼓祭り（愛媛県・新居浜市）、神田祭り（東京都・西馬音内盆踊り）（秋田県・羽後町）、花祭り（愛知県・東栄町）、エイサー（沖縄県・沖縄市）の八つ。また、古典芸能は「ムツゴロウ」（新作狂言／梅原猛作）、「恋重荷」（能）、「蘇莫者」（舞楽）、「平家物語」耳なし芳一（琵琶）、「菅原伝授手習鑑」天祥山の段（文楽）、「無明の井」（新作能／多田富雄作）、「蛸」（狂言）の七演目。

ふだんは見られない祭りと古典芸能の競演は、これまでにない見ごたえある舞台をつくり出し、観客を大いに魅了した。

二日目の大トリ、沖縄のエイサー

オープニング風景



の皆さんの踊りが熱を帯びてくると、会場の方々が次々に舞台に上がりだし、またエイサーの皆さんも舞台を降り、最後は舞台と観客が一体となった大団円になった。

アンケートの回収も二日で三千二百通を超え、想像を大幅に上回る回収率であったことから、観客の皆さんの高い満足度がうかがえる。実際に意見欄を見ても「満足」「見応えがあった」「感動した」といった

声に加え、来年度以降も継続して行ってほしいといった意見が多数寄せられた。

また、地域の活性化の一助にもなるように、会場の入り口付近には、実演された祭りの関係都県の観光ボスターを掲示し、パンフレットを多数置いた。もっと入場者に目立つ位置にコーナーを設定できたのではないかとやや反省もしたが、実に多くの方々がこのコーナーを訪れ、パンフレ

ットなどはほとんど残部がなくなってしまうた。

アンケートの結果にもあったように、「ぜひ実際に現地で見てみたい」といった皆さんの思いもきつと後押しになったのではなからうか。

試行錯誤を繰り返しながら準備に当たった初めてのこのイベントも、想像以上の成功を収められたと思っている。

梅原会長のコンセプトの素晴らしさ、プロデューサーやスタッフ

の皆さんはもちろん、出演者の方々の熱心さによるところが大きかったことは言うまでもないが、地域の祭りそれ自体の存在の大きさ、そして古典芸能との初めての本格的な競演によるエネルギーの高まりが最大の要因だったものと考えている。

地域の伝統芸能と古典芸能を同じ舞台で実演し、しかも「古典」芸能の新作を含めて実演することにより、古典芸能が現代に生きていることを伝えるなど、日本文化の深みに入り込む、新しい試みでもあった。

このイベントを通じ、地域に生きる人びとの地域活性化にかける意識を一層高め、全国的な地域活性化の機運を大いに盛り上げていきたいと考えている。

5 今後の予定

第二回目に当たる十三年度のテーマは「恋（こひ）」。来年三月末の開催に向け、広く全国の祭りを募集している。各地方公共団体におかれても、地域の伝統芸能などを活用した地域おこしのため、ぜひこの機会を積極的に活用していただきたい。

●問い合わせ先
総務省自治行政局自治政策課

役場とNPOがいついそいそになって



NPONeyチャースクール理事長
四方 洋

きっかけ

平成十二年度から千葉県のと田町でネイチャースクールをやっている。対象は社会人、大学生。一泊二日で一講座定員二十五人。初年度は七月の講座が台風で中止になり、左表のように五回しか開催できなかったが、十二月の花嫁街道ハイキングを除いて、希望者が定員をオーバーし、多いときは参加が三十五人になったこともある。絶対数は決して多くないが、回を重ねるごとに申し込みが増え、時代の風のようなものを感じている。

もともと東京・内幸町の日本記者クラブを会場に「日比谷一水会」という勉強会をやっていた。異業種の勉強会のはしりだった。毎月一回、講師を呼んで話を聞き、あと軽食のパーティーという集まりだが、毎回五十〜七十人のサラリーマンや経営者、主婦などがやってくる。地域にまで戻って活動する余裕はないが、途中下車の課外活動である。すでに二十一年目に入っているが、サラリーマンの生き方が変わってきた。ウチの会社の中だけの付き合いから、外への視界が拡大していると感じさせる歩みであった。

きっかけは、会場から外のビルの灯りを見ながら「この会を自然の中でやりたい」と思ったことである。場所を都心から田舎に変えることによって、お互いの交流にも、学習にも新しい息吹が吹き込まれるのではないか。

魅力あるプログラム

平成十年ごろから場所探しを始めた。三人の友人が和田町を推せんした。「和田。」という感じで、まったく知らない町だったが、気に入ったのは、①自然のすべてのコース(海、山、田畑、牧場など)がそろっている

こと②東京から近いこと(JRで二時間半)③開発の手が入っていないこと(ゴルフ場はゼロ)④人情が厚いこと―そしてなにより魅きつけられたのは、小学校が廃校になったあと、校舎と体育館兼講堂を利用して研修施設にしていることだった。しかも、この施設は地域の人たちが管理していて、土地でとれたものをお母さんたちが料理してくれる。

ただ町長は自然が残ったのはいいが、過疎と高齢化に悩んでいた。千葉県は人口が増え、高齢化率は一二%台と若い県だが、和田町はそんな中で、両方とも最高のレベルにある

- 第1回 (中止) 7月8・9日 和田学
●1日目
「森に入る」伐採と植樹「ネイチャーフォト」
●2日目
「ハイテク園芸」「マスオさんの声優・増岡弘氏の講演」(公開)
- 第2回 8月3・4日 くじら学
●1日目
「森に入る」伐採と植樹「ネイチャーフォト」
●2日目
「くじらの解体見学」「IWC報告会」(公開)
- 第3回 11月4・5日 和田の花学
●1日目
「森に入る」校打と植樹「さつまいも感謝祭」
●2日目
「ハイテク園芸」「花壇作りに挑戦」
- 第4回 12月2・3日 里山学
●1日目
「花嫁街道ハイキング」「ネイチャーフォト」
●2日目
「森に入る」校打と植樹「里山研究のケビン・ショート氏の講演」(公開)
- 第5回 1月27・28日 食べる農学
●1日目
「森に入る」(雨のため座学のみ)「昔ながらの食品作り」
●2日目
「農業高校での食品加工体験」「くじら料理教室」「ワイン教室」
- 第6回 3月17・18日 和田の海学
●1日目
「浜辺ウオーキングと磯の観察・採取体験」
●2日目
「定置網の見学」「干物づくり」「海洋資源調査員・上田勝彦氏の講演」(公開)「トーク&コンサート」



花壇づくりと磯歩き

った。東京が近いだけに、若者は簡単に出ていってしまう。戻ってきてくれないのが寂しい。安易に観光の道には進みたくないが、町を生き生きとさせたいと考えていた町長や町議会の人たちにとって、ネイチャースクールは魅力のあるプログラムであった。

日比谷一水会ではときに十人くらいのグループで、ときには三十人くらいで、ハイキングに行ったり、民宿での宴会に出掛けたりした。少しずつ町と町の人たちに慣れ、町では十二年度から予算を計上、実施に踏み切った。

きっかけはサラリーマンの勉強会だったが、準備が進んでくるにつれて、NPO化の話が出てきた。法律ができて、東京都に申請し、十二年一月には認証を受けた。NPO「ネイチャースクール緑土塾」は、当初の日比谷一水会から、退職したサラリーマンが一人の立場で加わったり、あるいは健康と生きがい開発財団の生きがいアドバイザー、船橋市で公民館活動をして

いる市民グループの代表などに幅を広げ、十一人の理事を中心に企画、運営に当たっている。

順調な運営

受け入れは町役場が行い、企画、運営はNPOが担当する。双方の意気投合がうまくいくかどうかはプログラム進行の成否を握っているが常に話し合い、連絡を取り合い、互い



クジラの解体見学

にやれるほうが受け持つ。たとえば講師にしても地元の農業高校の先生には役場から当たり、公開講座のほうのケビン・シヨート氏はNPOで交渉するといった具合である。

ネイチャースクールは、当初の勉強会を自然の中に持っていくという考えから、自然そのものを学ぶ、自然の中で作業をする、都市と農村の人間が交流するといった内容に移っている。カルチャーをどう加えているかは今後の課題だが、森林の中で俳句をひねったり、海の見える教室でヘミングウェイ論を聞いたり、いつかは実現したいと思っている。

一年目を振り返って順調にいったという評価をしたいと思います。参加者の感想は大半が「非常によかった」「よかった」の中に入っている。中には「将来、和田に住みたい」という人も出てきた。当初、町長と話をしたとき、「一人でも定住してくれる人が出てきたら、このプログラムは成功ですね」と確認していた。

組織の確立がカギ

もちろん問題点は多い。二年目の平成十三年度は五月二十六、二十七日から始まったが、一つひとつ改善していかなければならない。一つは

地元の広がりである。現在は役場の企画課が一手に引き受けているが、住民の間に浸透することが望ましい。町にもNPOができ、東京のNPOと協力して運営ができれば理想的である。そのとき、行政はうしろに引くことになるだろう。

東京のNPOも基本はボランティアである。中核になっている人は、会社を退職して顧問になったり、主婦だったり、時間の余裕はある。だが、このプログラムは移動する人間を相手にスケジュールをこなしていく、神経を使う仕事である。組織をいかにしっかり確立するかがカギになる。

ネイチャースクールは交流を大きな柱にしている。夜、体育館兼講堂に車座になって、あぐらをかいて酒を飲む。地元の人も一緒に歌を歌う。体育館には歴代の校長先生の写真が飾ってある。この雰囲気につられて心まで子供のころに戻る。二次会をいかにうまく盛り上げるかも成否を握っているが、いろんなグループには宴会の達人がいて、自然に楽しい空気をもたし出してくれる。

ネイチャースクールのキャッチフレーズは「歩くところが教室だ」行き合う人が先生だ」である。あなたの町村でも、挑戦してみたら。

ふるさとイベント大賞 ●受賞九団体を表彰

大賞に 十日町広域事務組合

イベントが選ばれた。

大賞を受賞したの



片山総務大臣から大賞を受ける
本田欣二郎・十日町地域広域事
務組合管理者（十日町市長）



岩田読売新聞社取締役広告局長
から優秀賞を受ける
横尾英彦・長崎市長



吉田地域活性化センター理事長
から部門賞を受ける
山崎昭・小松市助役



から特別賞を受ける
委員長 長瀬野町長
委員 田中
選考委員 田中

は、「大地の芸術
祭・越後妻有アート
トリエンナーレ20
00」（新潟県十日
町地域広域事務組
合）。六市町村が協
働し、地域の広大な

全国五十八新聞社との共催で 21世紀のふるさとづくり2001を開催

（助地域活性化センターは、四月十
六日、東京都千代田区のイイノホー
ルで、全国五十八新聞社と共催、総
務省および地方六団体の後援を得
て、「21世紀のふるさとづくり20
01—わがまちづくりの推進」を開
催した。

第一部は「第五回ふるさとイベン
ト大賞」の表彰式、第二部が講演、
シンポジウムなどで、自治体関係者
ら約七百五十人が参加した。

第一部に先立つ来賓挨拶で、片山
虎之助総務大臣は、地方分権の推進

に伴い、基礎的な自治体である市町
村の規模や能力を強化するための合
併の必要性を強調するとともに、分
権時代における地域づくりのため住
民の主体的・自主的な活動を支援す
る「わがまちづくり支援事業」の積
極的な活用を呼び掛け、地域づくり
に対するイベントの有用性を訴え
た。

続いて、今回で第五回目を迎えた
「ふるさとイベント大賞」の表彰式
が行われた。同大賞は、創意と工夫
に富み、地域の活性化に大きく貢献

したイベントのうち、とくに優れた
ものを表彰し、全国に紹介すること
で、個性豊かな地域社会の実現を目
的に創設された。

今回は、新世紀の幕開けを祝い、
各地で盛んに行われたイベントを対
象に「ミレニアム・世紀越え部門」
が設けられた。応募総数は過去最多
の百八十三イベントで、泉真也委員
長をはじめとする七人で構成する選
考委員会で厳正に審査した結果、大
賞一点、優秀賞二点、部門賞四点、
選考委員特別賞二点、合計九点のイ

界のトップアーティストが地元の人
びととの協働作業を通じて生み出し
た現代アートを野外展示するイベン
トである。アートを通した地域づく
りとして、またイベントの多様性・
可能性を広げるモデルとしても評価
され、今回の受賞となった。

受賞の挨拶で、十日町地域広域事
務組合管理者である本田欣二郎十日
町市長は、十日町地域の概要と文化
に触れながら、過疎と闘う同地域の
さまざまな試みの中で、今回の環境
と調和したアート展が生み出されて
きたこと、そして受賞を契機に、ア
ートを使った地域イベントを発展さ
せていきたいとその抱負を語った。

優秀賞には 福山・長崎両市

優秀賞の「第七回ゲタリンピック2000」(広島県福山市)は、全国の約六割のシェアを誇るゲタをテーマにしたユーモラスな競技を中心としたイベントである。アイデアが秀逸で楽しく、競技の楽しさや遊び心を通して地域内外に広く情報発信している点が評価された。

もう一つの優秀賞である「長崎ラタンフェスティバル」(長崎県長崎市)は、中国の旧正月を祝う春節祭にちなみ、市の中心部中華街で約一万二千個のラタンを灯し、中国色豊かな各種の催しを行うイベントである。異国情緒に富み、冬の長崎の一大風物詩へ成長した美しく盛大なイベントとなっている。

今回四部門となった各部門賞では、「文化・交流部門」が子供歌舞伎の伝統を全国に広く発信する「全国子供歌舞伎フェスティバルin小松」(石川県小松市)、「祭り・スポーツ部門」が地域の戦史をダイナミックな競技に仕立てた「源平火牛祭り」(富山県小矢部市)、「地域経済振興部門」が海と火を生かした幻想的なイベントをつくり上げた「大船

受賞イベント一覧

大賞

総務大臣表彰

大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2000(1回)

越後妻有大地の芸術祭実行委員会(新潟県十日町地域広域事務組合)

優秀賞

財団法人地域活性化センター会長表彰

第七回ゲタリンピック2000

ゲタリンピック実行委員会(広島県福山市)

優秀賞

主権新聞社代表(読売新聞社)表彰

長崎ラタンフェスティバル(7回)

長崎ラタンフェスティバル実行委員会(長崎県長崎市)

優秀賞

財団法人地域活性化センター理事長表彰

全国子供歌舞伎フェスティバルin小松(2回)

全国子供歌舞伎フェスティバルin小松実行委員会(石川県小松市)

優秀賞

財団法人地域活性化センター理事長表彰

源平火牛祭り(11回)

メルヘン市民委員会(富山県小矢部市)

優秀賞

財団法人地域活性化センター理事長表彰

大船渡・かがり火まつり(5回)

大船渡・かがり火まつり実行委員会(岩手県大船渡市)

優秀賞

財団法人地域活性化センター理事長表彰

GET21なんかん

音と光のカウントダウン2001(2回)

優秀賞

選考委員会委員長表彰

たんのカレライスマラソン(15回)

たんのカレライスマラソン実行委員会(北海道端野町)

優秀賞

選考委員会委員長表彰

西暦2000年世界民族芸能祭

「ワッショイ!2000」(1回)

西暦2000年世界民族芸能祭組織委員会(大阪府堺市)

選考委員会

●選考委員長

泉 眞也(環境デザイナー)

●選考委員

竹内 宏(経済評論家)

森まゆみ(地域雑誌編集人・作家)

新原 芳明(総務大臣官房審議官)

紀内 隆宏(全国知事会事務総長)

岩田 安弘(読売新聞社取締役広告局長)

吉田 弘正(財団法人地域活性化センター理事長)

能と文化を紹介し、交流をはぐくむ

「西暦2000年世界民族芸能祭

「ワッショイ!2000」(大阪府堺市)が選ばれた。

第一回から「ふるさとイベント大

賞」の選考委員長を務めている泉眞

也氏から、次のような総評があった。

「率直な印象として、全体の内容も

レベルも似通ってきてしまった。こ

の閉そくした状況を突破するには、い

ろいろなものを集大成し総合的な力

でやるか、徹底的に地元の歴史・特

徴にこだわったり、思い切って変わ

ったアイデアに固執するという二つ

の方法があると思う。今回の受賞団

体によってそのさまざまなタイプを

皆さんに見ていただきたいという意

味でこういった選考結果となった。

また、「二十一世紀の日本にとって、

重要となるモノをつくる技術を取り

入れたイベントを次回以降ぜひ拝見

したい」と希望を述べるとともに、「ふるさとイベント大賞は、全国の新聞社が一丸となって行っている唯一のイベントであり、このイベント自体が地域と世界を結び、世界と日本を結んでいくという、これからの日本の国のあり方そのものを暗示しているのではないか。ぜひこれを大切に育てていきたいというのが、審



授与者と受賞者による記念撮影

査委員一同の思いだ」と語った。

元氣村からのメッセー

第二部のシンポジウムでは、初めに京セラ株取締役名誉会長長稲盛和夫氏が「共生の哲学と循環の思想」をテーマに基調講演。

この中で同氏は、日本の景気は大

変深刻な状況にあり、政府も景気回復に全力を挙げているが、経済成長至上主義は本当に人類にとって正しいのか、このまま成長を続けることは可能なのかと疑問を投げ掛けた。さらに、「人類の英知を信じ地球を征服できると信じてきた結果、地球の環境問題が起き、地球資源の制約もある。これ以上のぜいたく、欲望を追求するのではなく、「足るを知る」ということをわれわれ人類はもつと考えるべきではないか」と提案し、「自然の環境を乱すことは人類の破滅につながるということを認識すべきだ。人類が本当にこの地球とともに共存し、地球、自然の循環の中で本当に生存しようというをやっているかどうかということを今一度心から考え直すべき時である。経済成長をもうこのくらいでということとは暴論かもしれないが、二十一世紀は新しいことを考える世紀と思うだけにあえて提案した次第である」と締めくくった。

続いて、「元氣村からのメッセー」そして、岩手県藤沢町長佐藤守氏、しまなみ交流連携倶楽部事務局長福羅健二氏が、二十一世紀のふるさとづくりの実例を紹介した。

佐藤氏は、「過疎とは、単なる人

口の移動ではなく、地域全体が衰弱し、その時代の存在価値を失うこと。そこに生きる人びとのふるさとに対する夢と誇りをつくるのがまちづくりである」と述べ、オーストラリアに設置しているセミナーハウスや、分譲住宅などを造り、都市から人を呼んでいること、他の都市の意見を政策立案の過程から取り入れているなど、町民総参加で行ってきたまちづくりの事例を紹介した。

福羅氏は、しまなみ海道ができたことにより、新しい環境のもとで自立しなくては、住み続けることは許されないと危機感から始めた、さまざまな手づくりイベントの経験について話し、その経験を通じて、「新しい価値を創造するというのは、自分たちがまず動き出して、それに対して行政が理解して全体に広がっていくのが大事。行政がお金を出してくれないとできないというのはまちづくりではない」と語った。

誇りを持てるまちづくり

最後は、「二十一世紀のわがまちづくりを考える」と題してパネルディスカッションが行われた。パネリストには、鹿児島県南のふるさとづ

くり推進協議会会長の石田尾博夫氏、Jリーグチエアマンの川淵三郎氏、富山県知事の中沖豊氏、俳優の渡辺文雄氏、コーディネーターにジャーナリストの野中とも氏を迎えて、活発な議論がなされた。

「自分たちの住むところが中心という発想」「住んでいる人が自分の町、生活、文化、教育、芸術を誇りに思えるまちづくりが大事」(石田尾氏)、「自分たちが住みよいまちづくりというのは、市民自らがつくらなくてはならない」「父親をもっとコミュニティに引っぱり出すべき」(川淵氏)、「ナンバーワンよりオンリーワンの地域づくり」「住民が中心となった自発的な地域づくりが根本。国はその支援、情報の地方分権などにも尽力をしていただきたい」(中沖氏)、「自分たちのまちという『所有感覚』が大事」「地域づくりに一発逆転はない。ねばり強さが大事である」(渡辺氏)などと熱のこもった意見が出され、その中で、「住む住民として誇りと愛と、長期ビジョンが結べるような地域づくりをはじめなくてはならない」という一定の方向が示された。

（財）地域活性化センター業務一課
副参事 村杉容子

社会的弱者の交通手段確保で



新安哲次

愛知県豊春町福祉部福祉担当常務

機構改革で
役職名を専務、常務に

西春町は、名古屋市の北部に接する人口三万三千人、総面積十平方キロのコンパクトな町である。平成十三年四月、町ではほかに類例のない機構改革を行った。これまでの課制を廃止してグループ制とし、セクションによって固定されていた仕事を、新規事業や住民の要望に応じてグループごとに編成替えを行った。また、民間の意識を導入するため、部長、課長といった役職名を「専務」「常務」に改めた。町ではこの機構改革により、前例踏襲、たらい回し、先送りのない、真に住民本位の町政運営に職員一丸となって取り組んでいる。

町には、町の東部を南北に地元の私鉄、名鉄犬山線が縦断し、一日当たりの乗降客が二万五千人の西春駅、一万人の徳重駅と、二つの駅がある。しかし現在、町内には駅と各地区をアクセスする路線バスがなく、西春駅前のタクシー利用が唯一

の交通手段となっている。

7人乗りのワゴン車で
週2回、1日2往復



こうした状況から町では、独り暮らしの高齢者や高齢者夫婦世帯、また障害を持った、いわゆる社会的弱者といわれる人の移動手段を確保するための各種施策を、「西春アクセスネット事業」として体系的に実施してきた。障害を持った人へのタクシー基本料金補助（年間四十八枚）、ガソリン券補助（年間百四十枚）、ストレッチャー付車両を配車する外

出支援サービス、介護保険タクシー事業がその主なものだ。

七人乗りワゴン車の福祉乗合タクシーも、このネット事業の一つとして四月から開始した。

タクシーが「来る」、町内を「くるくる回る」ことから、「くるくるタクシー」と名付けた乗合タクシーは、火曜日と土曜日の週二回運行する。町の最も北、西、南に位置する三地区を起点に、医療機関、ショッピングセンター、公共施設へ一日二往復する。高齢者と障害を持った人を優先するが、町民なら誰でも一回百円、ワンコインで利用できる。ワゴン車は、タクシー会社二社から一日当たり六時間借り上げ、車いすの利用も可能な車両だ。借り上げ料は一日六時間当たり三万五千円。週二回、年間五十二週運行する計画で、消費税を含め三百八十三万二千円を今年度予算に計上した。四月一カ月は無料、五月から有料にした。実施前には利用者が少ないのでは、との声もあったが、PR効果もあり、

評判は上々だ。

福祉の心伝える
町民劇団も活動

また西春町では、時代劇を通して「他の人を思いやる」という福祉の心をメッセージで伝えることを目的とした「町民劇団福祉座」が活動が続いている。福祉座は、股旅物の芝居の中に介護保険を取り上げるなど異色の公演

活動を続ける、県下でも老舗の町民劇団だ。



この活動に象徴されるように、町では、常に新しい発想で福祉施策に取り組んできた。本年の福祉座公演には、くるくるタクシーにからめた場面も登場する予定だ。三度笠の渡世人も利用する、ほかに例を見ない先進的な取り組みだと自負する、くるくるタクシーが、一人でも多くの住民の皆さんに愛されるよう、願ってやまない。

満喫しよう 自然の優しさと 人びとの温かさを

グリーンツーリズム
国際大会を開催

南会津地方は、三町四村で構成され、面積は香川県に匹敵、その約七〇％が山林である。国の天然記念物で自然の宝庫である駒止湿原をはじめ、緑豊かな山々や清流に恵まれている。八百年以上の歴史を持つ伝統的な民俗芸能である会津田島祇園祭は毎年七月に開催され、昭和五十六年、国の重要無形民俗文化財に指定されている。かつては会津と江戸を結ぶ日光街道の宿場町として栄えた南会津だが、現在の人口は三万六千人余。高齢化・過疎化が進み、地域の深刻な問題となっている。

そんな中、農村の豊かな自然環境を教育の場としてとらえ、交流人口を増やすことによって、地域の良さを知ってもらうとともに、住民に自

分の地域の生活空間や日常の生活文化の良さを再発見してもらおうと始めたのが南会津グリーンストッククラブ。平成八年五月、会津鉄道沿線三町村の企業家や若手商店主、役職員、農家、主婦、地元会津鉄道社員、筑波大学の先生や学生など（うちインターン者が三人）約四十人で結成。代表は星義夫氏。

「いろいろ悩んだり、考えたりすること大切だが、行動することが第一と考えるメンバーが多かった」「二十年先というスパンで、できることから始めようということでした。グリーンツーリズムを南会津において定着させていくためには何をすべきかをみんなで話し合い、そして取り組んできた」と星さんは言う。豊富な緑を、訪れる人びとに満喫してもらい、自然の中での体験



活動の場提供を主眼としている。

鉄道見直しで「トレイン&バイク」運動展開

そこで、出たアイデアが、公共交通機関としての鉄道とサイクリングを組み合わせた「トレイン&バイク」運動。鉄道と自転車を利用することによって行動範囲を比較的広げることができ、自転車での行動派にも広がるし、鉄道を利用する人も増える。地域の足である会津鉄道を元氣付けると同時に、地域の活性化にひらけようという狙いがある。

十年前からこの地域で農山村の問題を調査してきたレジャーやスポーツと地域振興の専門家筑波大学の松村和則助教授にもこのアイデア実現

に向けバックアップをしてもらい、クラブ設立当初から企画に参加してもらった。年間五回ほど、自転車持ち込み可の臨時貸切車両を走らせるというイベントを行い、すでに二十回以上を数えた。地元会津鉄道に自転車を積んで出かけ、緑の野山を眺め楽しみながら、自転車に乗ってぶらっと散歩する。「ゆつくり自然を楽しむ旅、そんなライフスタイルを提案していきたい」と会員の湯田康弘氏は語った。

九年十月には「グリーンツーリズム国際大会」を主催し、国内外の専門家を招いた。米国からの発表では廃線になった地方鉄道の見直しなど、車社会の流れを変える運動などの紹介があった。同クラブでも「トレイン&バイク」を二過性のイベントではなく、地元に着着するよう、一般車両に四基程度のスタンドを付け、いつも自転車を持ち込めるようにしたいと会津鉄道に提案している。

将来的には、自動車がなくなつた旧国道や県道と里道を結びサイクリングやハイキングのコースを造り、観光客が増えた駒止湿原一帯をマイカー乗り入れ禁止にできればと

考えている。同クラブのメンバーは、「列車に自転車を持ち込む」試みを、さらに自然と人びとの共生へとつなげようと案を練っている。

人 材育成目指し 山村大学を開講

これらの活動をより多くの人びとに知ってもらおうと大学の研究者と連携して、十一年度から「山村大学」を開講した。これは、講演会、シンポジウム、大学の課外授業、体験学習などを組み合わせた企画であり、地元の人材育成と交流人口を増やすことを目的に継続的に続けている。

昨年度は、作家のC・W・ニコル氏を招き、講演会とパネルディスカッションを行い、南会津の現状と今



後の地域資源の生かし方について白熱した議論を交わした。また、そば打ち体験や星空観察などでは、地元の住民が先生役にもなる。ほかに、サイクリング、カヌー教室やアニマルトレーニングなどの自然体験活動といったメニューも用意されており、自然と触れ合い、人間性を豊かにし、都会暮らしで疲れ気味の体をリフレッシュしてもらっている。地域外の人との交流を通じて自分たちの住んでいる地域の良さを再認識し、誇りを持ってもらう。そして、野外教育を通して地域の人びとの「新しい職」を創出し、地域経済の発展を目指しているのである。

「緑豊かで多くの自然が残る奥会津

を一人でも多くの人が訪れ、心をいやし、人びととの触れ合い、温かさを感じ、失いつつある人間性を回復してほしい。さらに、中山間地域に住む者に生きる喜びを実感してほしい」と思っている。「将来は、この南会津を「野外教育のメッカ」と呼ばれるようにしたい」と事務局長の芳賀沼伸氏は語った。

南 会津を 第二のふるさとに

「トレイン&バイクや山村大学などを試みる中で、自然を素材にした活動は、その発想さえ刺激すればいくらかもあることを知った。今後は、現在のプログラムに改良を加え、体験休暇村のような形で、農山村の良

さを二、三日の短期滞在ではなく、一週間程度滞在して、心のリフレッシュを行い農山村の良さをより体験していただけるようにしていきたい」「人と人の触れ合いの場を広げ、人びとに、そして地域に活力を与え、そのうち南会津を「第二のふるさと」として身近に感じてもらえればと願っている」と星さんは将来の目標を語った。

取材帰りの電車で会の皆さんの温かな笑顔が思い出された。また来てみたい。わたしの第二のふるさと、人と自然を愛する人びとの住む南会津へ。

前助地域活性化センター業務第二課
副参事 長友孝朗

南会津グリーンストック
クラブ
プロフィール

●設立年 平成八年五月 ●設立主体 民間主導 ●運営主体 自主組織
●代表 星 義夫 ●事務局 長 芳賀沼 伸 ●会員数 四十九人 (男三十九人、女十人)
●事務局 連絡先 福島県南会津郡田島町大字針生字愛宕下一一五の二

手作り馬で 初午祭に参加 行政も期待する メンバーの活動

生涯学習セミナーが
きっかけ

この会が結成されたのは平成八年。その前年に隼人町が実施した

「第一回生涯学習講座ウィメンズセミナー」への参加者のうち、翌年の第二回セミナーの運営委員に名乗りを挙げた女性たちにより、今まで学習した成果を行動に移すことを目的として結成された。

会の活動は多岐にわたる。まずは文化講座の開催である。これは、町で行っていた生涯学習講座が平成十年で打ち切られたため、それでは自分たちでやってみよう、ということで開催したのである。第一回は、十

一年五月に「パッチワーク」をテーマとして、N H Kにも出演している山口怜子氏を講師に迎えて開催した。

その後、文化講座は現在まで三回開催されているが、テーマは、第二回が「フラワーデザイン」、第三回は「性と生の学習」となっており、メンバーそれぞれの得意分野から選定している。ちなみに、三回目のテーマは、助産婦で思春期相談員である当会代表の中野ヨシ子さんが講師を務めた。講座には毎回町内外から女性を中心に約百人が参加しており、回を重ねるごとに反響も大きくなっていく。



実を結んだ
学童保育

ウィメンズ隼人の七人のメンバー（左から四人目が代表の中野ヨシ子さん）

鹿児島県隼人町には、四百五十数年の歴史を持つ「初午祭」という伝統行事がある。この祭りは、鹿児島神社において旧暦一月十八日に一番近い日曜日に開催され、二十数頭による馬のマンボ踊りや二千人の連による踊りが見られることから、毎年二十数万人の人流でにぎわう。この伝統行事とタイアップする形で、隼人町に新たなイベントをつくり出したのが今回紹介する「ウィメンズ隼人」である。

地方都市という土地柄のせい、学童保育に反対する声もかなりあり、町民すべての理解を得るのはなかなか容易ではなかった。

そのような状況の中で、メンバーは実施を待つ親との懇談会を開催して、親が積極的に行動を起こすことの必要性を意識させるなど、根気強く活動を続けた。その活動が実を結び、隼人町でもこの四月からメンバーがきっかけづくりを行った地域において学童保育が実施されるようになった。

中でも最もメンバーが力を入れていく活動が「手作り馬コンテスト」の実施である。このコンテストは、

冒頭で紹介した初午祭と連動して行われるイベントである。

九年一月、隼人町をより良い町にするためにウイメンズ隼人としてどのような活動をすべきかについて、町内の女性から意見を聞く「女達の新春初夢パネルトーク」を実施した。ここで比較的多かったのが初午祭に関する意見で、実施場所や町民の参加方法などについて参加者から積極的な意見交換が行われた。

そこで、伝統的な初午祭のじゃまにならずにみんなが気軽に参加できる方法はないか、ということになり、考え出したのが「手作り馬」であった。これは初午祭が行われる鹿兒島神宮の参道と直角に交わるJR隼人駅前の道路を、自分たちの手作りの馬で踊り歩くものである。

翌年からはコンテスト形式にして内容をパワーアップ、以後、毎年十数団体、約四百人が参加している。出展作品は回を重ねるごとに工夫が見られるようになり、空き缶で作った「エコホース」や「ロボットホース」などのユニークな作品が、参加者を大いに楽しませている。参加団体も、地元の高校生グループ、小学生の児童、親と担任のグループ、重度身障者施設のグループなどバラエ

ティに富んでいる。

地域経済振興で 特産品販売

また、このイベントは「地域経済の振興」を目的の一つにしていることから、「一日ウイメンズ商店街春の市」と銘打って、南のふるさとづくり推進協議会（事務局＝鹿兒島県地方課）や町の企画課をはじめとする多くの関係者の協力を得て、会場で特産品などの販売も行っている。

当初は、伝統行事を重んじる人びとからの風当たりも強かったのも事実である。四百年以上続く伝統行事に手作り馬とは何事ぞ、というわけである。しかし、参加者の生き生きとした、楽しそうな様子に、そういった考えの人びとも理解を示し、初午祭も手作り馬コンテストも、お互いが協力することで地域をますます発展させていこうということになった。そして十二年からはメンバーが初午祭の実行委員会に参加するまでになったのである。

このような活動のほか、メンバーの行動力を見込まれて、さまざまな方面からウイメンズ隼人に対する要請が多い。とくに多いのが、セミナーにおける分科会の企画・運営の依頼である。そのほか、各地で行われ

るフォーラムのパネラーや講演会の講師の依頼も多く、得意分野に応じてメンバーがあちこちを飛び回っている。

このように多忙なメンバーであるが、毎週一回メンバー七人全員が集まることで意思疎通を図っている。この会合は午後八時から始まるのだが、話に夢中になって、気が付いたら日付けが変わっていたということもしょっちゅうあるそうだ。

一番の悩みは 資金不足

現在メンバーが抱える一番の悩みは資金不足の問題である。「何事にも縛られたくない」という考えから、町の助成金も受けていない。その代わり、フリーマーケットや映画の上映会などを行って資金づくりをしているが、メンバーによる持ち出しも結構多い。

どこからも縛られず、自分たちが納得したうえで汗を流して行動したい、というメンバーの理想がある一方で、行政側からは町内の地域づくり団体のコーディネーター役を務め

てほしいというように、メンバーに対する期待も大きい。

このような理想と現実に悩みながらも、中野さんを中心にメンバー全員がとことん話し合って、自分たち



手作り馬コンテスト

が納得して行動することで、ウイメンズ隼人が今後ますます発展していくことを期待したい。

（地域活性化センター業務第一課
副参事 宮本明人）

21世紀のまちづくり目指し、CI導入

福島県小高町は、二十一世紀のまちづくりを目指してこのほどCI（コミュニケーション・アイデンティティ）コミュニケーションマーク、スローガンを決めた。

CIは、町の将来あるべき姿や目標となるビジョン、方向性を明確にし、統一された町のイメージを視覚を通じて形成するのが狙い。併せて町全体の意識を高め、町内外の人びとに固有の小高町らしさ、小高町の存在価値、小高町を目指すものについて共通の認識を持つて考えてもらうというのが目的。

同町は福島県の東部、相馬郡の最南端に位置し、東は太平洋、西は原町市、南西は原発基地のある双葉郡浪江町に接している。総面積は九二・九五平方キロ、人口は約一万三千八百人。温暖な気候と緑豊かな自然に恵まれており、相馬野馬追い祭りをはじめとする歴史と文化の町である。秋恒例のイベント「ギネスに挑戦」では、「のりまき八百二十二回」、全長十五回の「新聞紙で宝船」など毎

年趣向をこらした催しを行っている。

今回決めたコミュニケーションマークは、小高町が明るい未来に向かって羽ばたくことをイメージ。「鳥の羽」をモチーフにしたことで軽やかな動き、繊細さ、人の温かさ、動きの楽しさを感じさせるようにした。

このマークは「？」や「！」にも見える。これは小高町がいろいろなこと

に挑戦し、課題を解決しながら前進し、新しい感動や驚き、ひらめきを感じるといった、感性の豊かな町を目指していくことを表している。マークの色は青で、「澄みきった小高町の空の色」であり、「穏やかな海の色」でもある。

スローガンは「人うこき 心うこかす 本気まち」。町民に対して、「ふるさと小高町づくりは町民が主役。町のために何ができるかを考え、みんなが小さな行動を積み重ねて新しい小高町を創り、みんなで本気

まちの町民になろう」とのメッセージを送っている。

小高町のCI活動は平成十一年十月、江井績町長の「地域活性化には何よりも意識改革が重要」との発想でスタート。まず「役場CI」のため、各課の若手職員を中心に十一人

小高町の
コミュニケーションマーク

で「CI役場ワーキンググループ」を結成。「考え

ます 町の将来・みんなの未来」を掲げ、アンケート調査で出されたさまざまな話題を解決する手段として「CI役場変革二十一世紀プログラム」を作成。

十二年度にはCI活動の範囲を町全体に広げ、町民十五人で構成する「CI町民会議」を中心に「地域C

I」に取り組んだ。この間、CI先進自治体といわれる北海道白老町・追分町、青森県野辺地町、宮崎県都城市を視察、これら事例を参考にしながら小高町CIを決めた。

江井町長は「行政と民間が一体となつて知恵を出し、行動に移すことが

大切」とし、役場ワーキンググループを主体に、できるものから実行に移していく方針。

また地域CIのため、職長の名刺や役場の封筒にCIマークやスローガンを刷ったり、インターネットを通じて情報発信運動を展開する。

おだか

地域だより

全国花火サミットを開催 第1回は茨城県土浦市で

茨城県土浦市は、全国でも屈指の花火大会を行っている新潟県長岡市、長野県諏訪市、静岡県袋井市とともに持ち回りで「全国花火サミット」を開く。

第一回は土浦市での花火大会に合わせ、十月六、七の両日、同市主催で実施する。サミットでは、花火の将来について話し合うほか環境問題、



れる。また「国道、バイパスの植え込みにまでごみが捨てられている」(環境衛生課)ことから公用車にごみ袋を常備

運営方法などを協議し、その結果を全国に情報発信する。費用は参加団体が負担する。土浦市では秋田県大曲市、東京都墨田区にも参加を呼び掛けている。

公用車に専用ごみ袋 静岡県清水市

静岡県清水市は四月から、市長車を含む二百四十九台の公用車全車両に専用のごみ袋を常備し、公務中に職員が市内でごみを見つけた時に拾うなどのクリーン作戦を始めた。

同市では、日ごろ職員に対して街頭でのごみ拾いを率先して行うよう指導している。

来年はサッカー・ワールドカップ、再来年には静岡国体が開催され、国内外からかなりの観光客が訪れると予想さ

することになった。袋は四十センチ×六十センチの大きさで、一台につき二十袋。拾ったごみは職場に持ち帰って、庁内のごみと一緒に捨てる。

ローマに少年使節派遣 クリシタン大名ゆかりの市町

一五八二年(天正十年)、クリシタン大名の大村純忠らが派遣した天正遣欧少年使節ゆかりの自治体は、日本におけるイタリヤ年の今夏、「平成の遣欧少年使節団」をローマに派遣する。

計画によると、天正使節の出身地である宮崎県西都市、長崎県大村市・千々石町・西海町・波佐見町の二市三町から中学生男女一組計十人を「平成の使節」として八月二日から十日までイタリアに派遣、ローマ法王に謁見する。

これら自治体では個々にイタリアに少年使節を派遣してきたが、関係自治体合同では実に四百十九年ぶり。

住民票を消防分署で交付 三重県鈴鹿市

三重県鈴鹿市は、住民サービスの一環として七月から消

防本署と四つの分署で住民票の交付を始める。消防本署での交付事務は茨城県取手市、千葉県市川市などで実施されているが、「分署でのサービスは全国でも初めて」(市民課)という。

この方法は、住民票の交付を求めるサラリーマンなどが勤務で忙しくて市民課の窓口に出掛けられない場合、電話で予約申請すると希望する時間に最寄りの消防分署で交付が受けられるというもの。

予約申請は午前八時三十分から午後四時三十分まで市民課で受け付け、消防署員が本庁から申請人が居住する近くの出張所に住民票を取りに行き希望日時に渡す。申請した人は運転免許証、健康保険証など身分証明書を提示し、交付を受ける。二十四時間いつでも可能だが、火災や救急業務

など突発時には交付ができないこともあり、市広報誌でPRする。

トライアスロン 山口きらら博大会で

トライアスロン・ワールドカップが、山口きらら博覧会の会場で開催されることになり、世界規模のスポーツツイベ



ントとして、注目を浴びている。

コース全体が博覧会会場内の周囲コースとなっており、選手たちの姿を十五回も間近で見ることができると、選手と観客が一体となって盛り上がる演出効果の高い「観戦重視型」の競技会場として、国際的にも高い評価を得ている。この夏、八月十二日に、山

口きらら博会場を訪れると、アテネ・オリンピックを目指したトップアスリートたちの熱き闘いを間近で観戦することができる。

【問い合わせ先】大会事務局
電話〇八三一九三三三二六五

教えてくれませんか課新設
愛知県岡崎市

愛知県岡崎市は、市民からの問い合わせ、要望、提案などにじん速に対応するため、四月から市長公室に「教えてくれませんか課」を新設した。

とかく役所の組織は分かりにくく、電話で問い合わせるとタライ回しにされるケースや住民の要望がなかなか市上層部に届かない、といった不満がある。

教えてくれませんか課は、これまでの自治課、広報課の一部を組織変更。事務を担当する一班、市民の苦情処理のため現場に出掛ける二班、民事、交通事故などの相談を扱う市民相談班で構成。総勢二十八人。課の新設は昨年九月初め当選した柴田紘一市長が公約に掲げていた。

センタースタ通信

◇インパク自由参加パビリオンへの出展

（財）地域活性化センターは、四月一日からインパクの自由参加パビリオンに「わがまちづくりひろば」を出展した。

このパビリオンは、総務省の平成十三年度新規施策である「わがまちづくり支援事業」について、市町村における取り組みの状況や活動される方々の様子を紹介するとともに、自分たちの住む場所で行



われている「わがまちづくり」について投稿や自由に意見交換ができるコーナーを設けている。アドレスは、
<http://www2.chiki-dokuri-hyakaor.jp/impaku/index.html>

◇ふるやひろば事業事例集を発行

（財）地域活性化センターはこのほど、ふるさとづくり事業事例集「ふるさとづくりキー

笑顔がいちばん！ 放送予定

●6月3日
東京都あきる野市、八王子市春と緑と夢家族
川が育んだ文化とスポーツ

●6月10日
広島県庄原市、世羅郡やまなみ大学開学
花園の結婚式

●6月17日
栃木県塩谷町、野木町
名水の郷を花で飾ろう
太陽に祝福されて始まる野木町の夏

●6月24日
和歌山県野上町、吉備町
動物とふれあひ、緑豊かな自然を満喫できる公園
元気がいっぱい！ 春の吉備路

TBS系、毎週日曜日
午前7時～午前7時30分
※一部放送日時が異なる地域があります。

平成13年度 海外視察調査団

（団員募集開始）

（財）地域活性化センターは毎年、地域づくりに関する調査を目的とした海外視察調査団を派遣しており、参加者から好評をいただいております。

平成13年度も次のコースを企画いたしましたので、ぜひご参加ください。

●視察テーマ●

ヨーロッパ地域づくり視察調査団・住民参加・循環型社会・PFI・IT化施策一

現在日本では、循環型社会の形成やIT化施策の推進などいろいろな課題を抱えております。今後とも社会環境の変化などにより、さまざまな問題への取り組みが求められます。調査団はこれから重要と考えられる住民参加による行政改革・まちづくり、循環型社会形成、PFI促進、IT化施策の4つのテーマについて、ヨーロッパの先進地を視察し、21世紀を迎え地域づくりにあたって取り組むべきことを調査するものです。

- 訪問国＝イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア
- 訪問地＝ロンドン、パリ、ローテンプルク、ザルツブルク、ウィーンなど
- 日程＝平成13年10月15日（月）～26日（金）●費用＝660,000円
- 募集人員＝25人程度●お申し込み＝平成13年7月31日（火）まで

（財）地域活性化センター業務第2課 ☎03-5202-6137

ワードBOOK」の平成十二年度版を作成し、全国の自治体に配布した。この事例集は総務省からの委託を受けて実施されており、今回で第十一号となる。

本書では地域活力創出ブラ

●首長来訪

▼長野県木曽福島町 田中勝
已町長（4月17日）

ン関連事業およびふるさとづくり事業で整備された施設の活用事例を紹介している。

世紀を越えて、
二十世紀梨の花が咲く頃、
新しい物語が始まります。

日本初「梨のテーマミュージアム」鳥取二十世紀梨記念館が、
鳥取県鳥取市「いよいよ開館」
今、新たな梨の世紀が訪れようとしています。



鳥取二十世紀梨記念館 4.27金開館



○左側の円形建物が鳥取二十世紀梨記念館。

鳥取二十世紀梨記念館は、面積500㎡の円形構造。中は大きくホールや観覧室、展示室、図書室、売店などがあり、お茶の間やカフェ、子ども遊び場など、様々な施設が揃っています。また、鳥取県産の梨や、鳥取県産の梨を使ったお菓子や、鳥取県産の梨を使ったお土産など、様々な商品が揃っています。

開館時間 午前9:00～午後5:00
休館日 毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)
年末12月28日～12月31日
入館料 大人 500円(20人以上の団体400円)
小・中・高生 200円(20人以上の団体160円)
お問い合わせ先
鳥取二十世紀梨記念館
〒682-0816 鳥取県鳥取市駄経寺町198番地4
TEL(0858)23-1174 FAX(0858)47-1174
<http://www.nashikinenkan.com/>
E-mail: info@nashikinenkan.com



■マイカーで 鳥取市から約10分(鳥取自動車道) 鳥取市から約10分(鳥取自動車道) 鳥取市から約10分(鳥取自動車道)
■鉄道で 鳥取市から約10分(鳥取線) 鳥取市から約10分(鳥取線) 鳥取市から約10分(鳥取線)
■飛行機で 鳥取市から約10分(鳥取線) 鳥取市から約10分(鳥取線) 鳥取市から約10分(鳥取線)



村のおきの人

山口県の西北部に位置する福栄村は、総面積九八・三平方。の中山間地帯で、山紫水明の自然の中で静かなたたずまいと、訪れる人びとに人の心のぬくもりが伝わるといわれるような、素朴な伝統を持っています。

村では、農業の担い手不足対策の一つとして、県下に先駆けて新規就農者の受け入れ態勢を整えており、農業に意欲を持って村にやってきた人々たちを、村ぐるみで支援しています。

また、プロの農業経営者を育成する機関として、農業農村活性化塾「夢るゝらる雲海塾」を開講しました。

この塾では、福栄村でプロの農業経営者を目指す多様な人材を集め、おおむね二年間の研修期間中に具体的な就農準備を行います。村の内外、農家、非農家を問わず真剣に農業に取り組もうという意欲のある人ならだれでも入塾が可能で、これまで四組の入塾者がプロを目指して研修を始めています。



E V E N T C O R N E R

6月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

6月6日
赤堀町（群馬県）

6月7日～8日
飯山市（長野県）

6月13日～14日
小田原市（神奈川県）

6月26日～27日
東根市（山形県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

6月4日～8日
中国五県観光物産協議会（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）

6月18日～22日
土浦市（茨城県）

6月25日～28日
徳島県



4月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

4月19日～20日
駿府本山お茶まつり実行委員会
（静岡市）
駿府本山お茶まつり①

4月23日～25日
伊奈町（茨城県）
伊奈町観光PR②

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

4月2日～6日
飯山市（長野県）
いいやま菜の花まつり

4月9日～13日
上越市（新潟県）
上越市の観光inふるさと情報プラザ③

4月16日～20日
佐賀県
佐賀県の観光物産展

4月23日～27日
第5回ふるさとイベント大賞パ
ネル展

編集後記

▼水無月といわれる六月は梅雨どきで、水に親しむ候でもある。今回の特集「水保全と環境」では、国土庁（現国土交通省）が選定した「水の郷百選」の中から九つの自治体を取り上げた。

高度成長でわが国は世界の経済大国になった。しかし、同時にさまざまな公害をも引き起こした。環境対策に前向きだったのが、その必要性を肌で感じた住民だ。汚れた川のゴミ拾いや清流を取り戻そうと稚魚を川に放流したり、啓蒙運動を展開し、行政を動かした。鮭が古里の川に遡上した例を最近、よく耳にするようになった。運動が実を結んだといえる。原点は「水をきれいにしよう」である。小泉首相も「自然との共生」をキャッチフレーズに環境問題を重視している。個々人の力は小さいが、みんなで取り組めば自ずと道が開ける。それが「まちづくり」の基本ではなからうか。

▼当誌の編集委員として企画立案、誌面づくりに関わった高橋康志（岩手県）、木村隆広（第一勧銀）、花輪幾夫（山梨県）、草野恵（三条市）、長友孝朗（宮崎県）、田口竜也（北海道）の各氏はそれぞれ帰任された。新しい職場での活躍を期待してやまない。（やなぎ）

特集Ⅱミステリーのまち

地域づくり6月号

平成13年6月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代） <http://www.chiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社



「あなたの夢・未来の街づくり」応援します。

地域づくり六月号(通巻144号) 平成十三年八月一日 創地域活性化センター発行

二科展デザイン部 入選作品
(財)日本宝くじ協会理事長賞
加藤明美

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、宝くじ
身近な街づくりに役立っています。

財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり買って、しっかり換金。

宝くじのホームページ
<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。